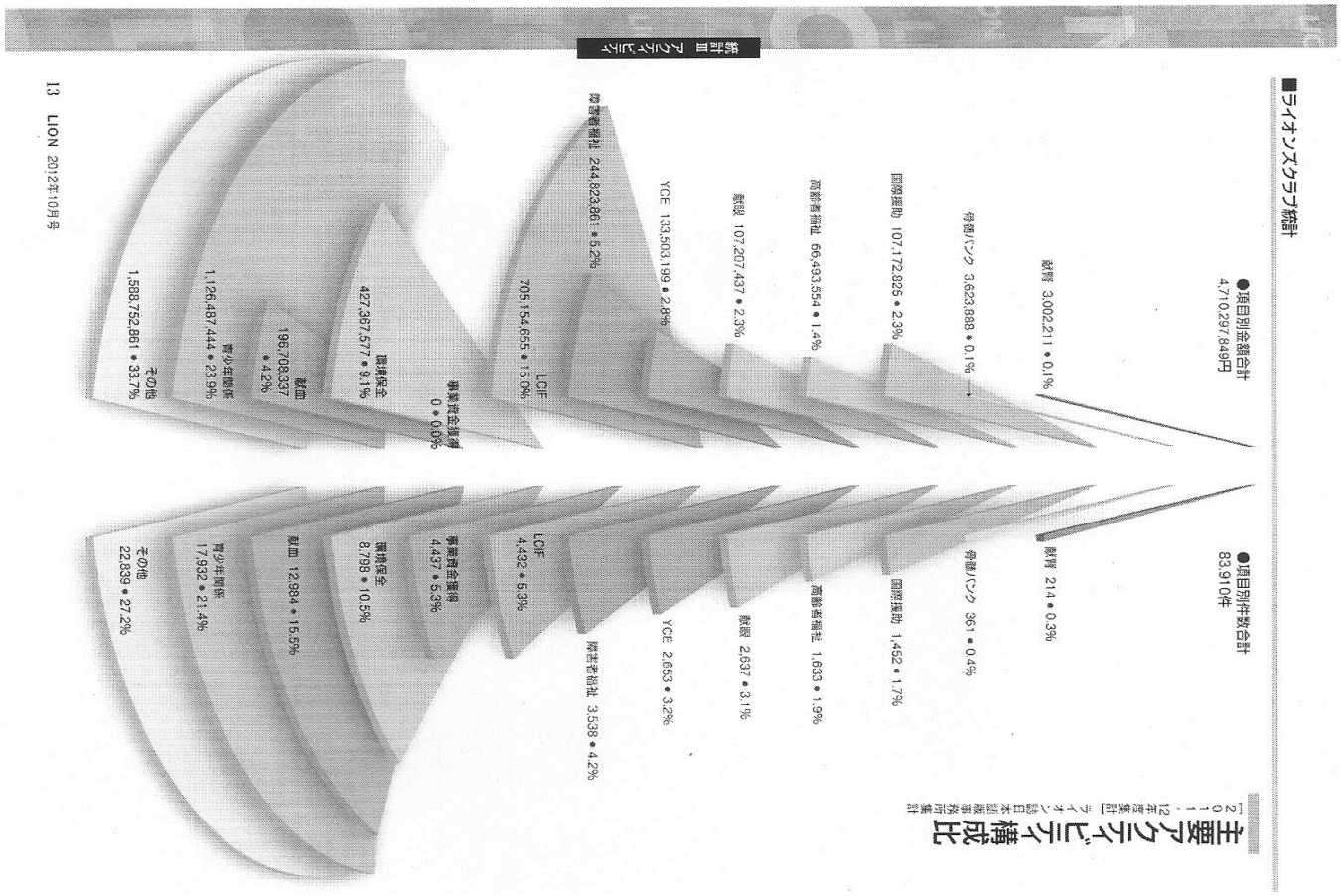
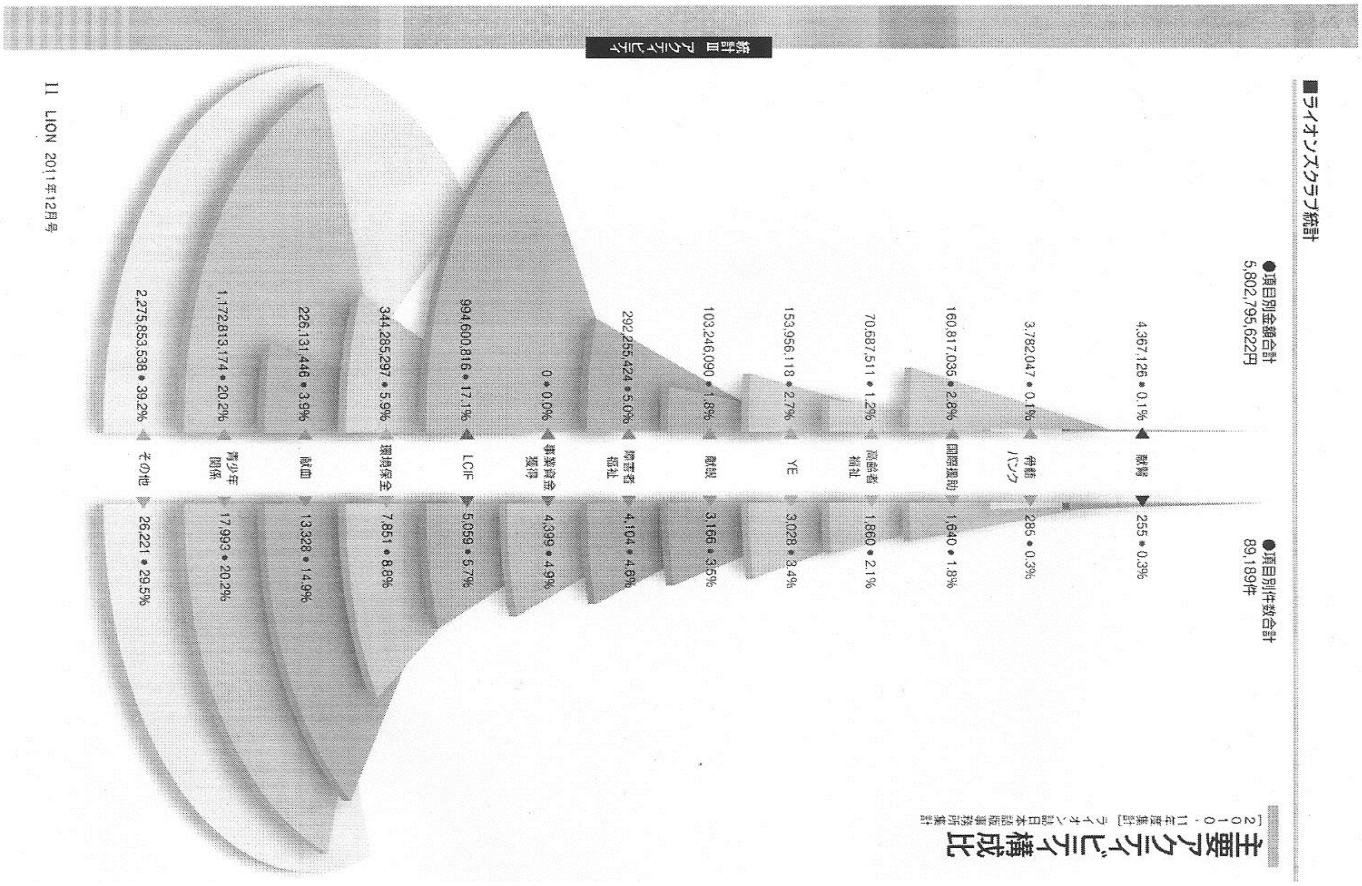
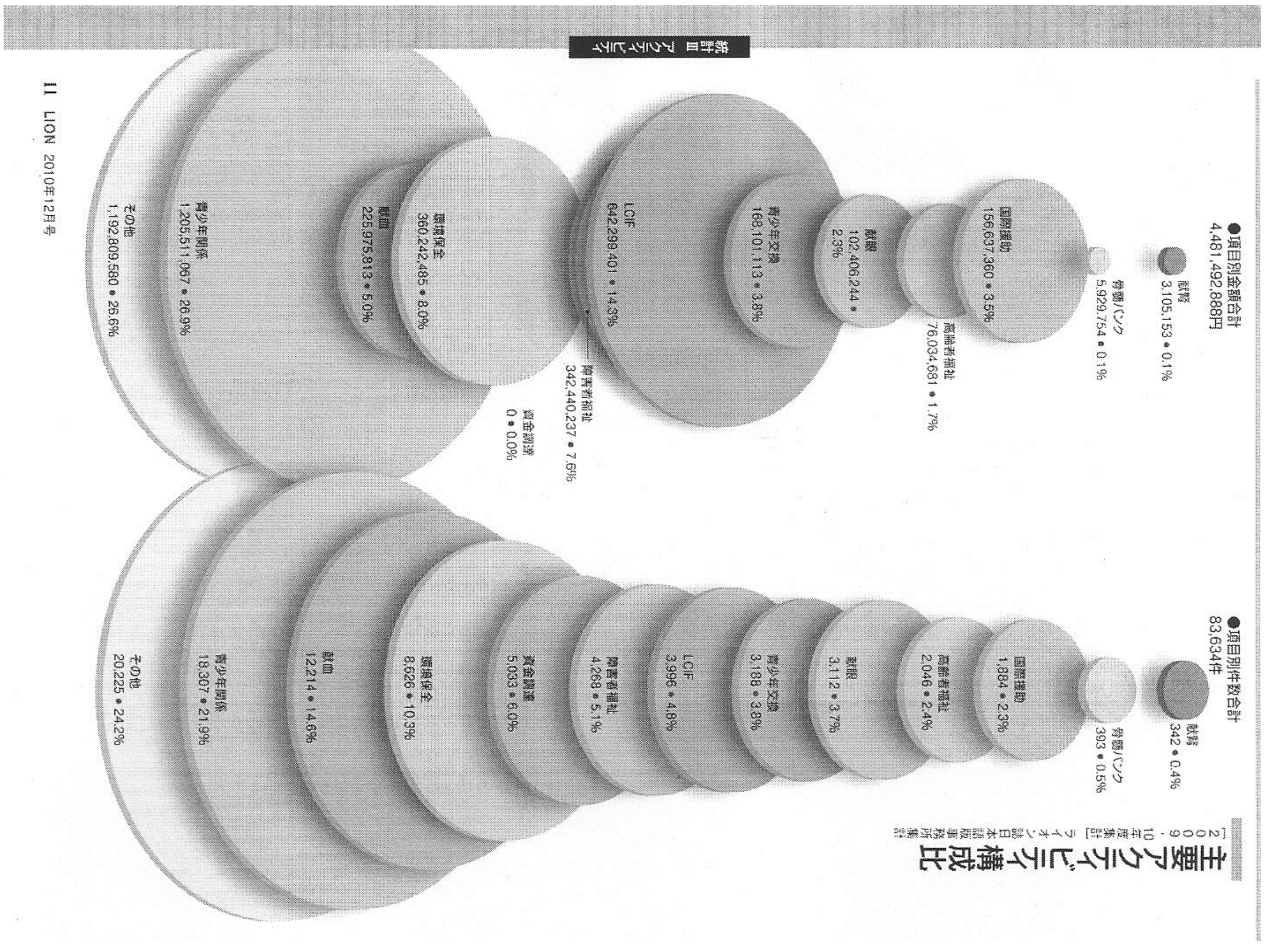
資料１０－２

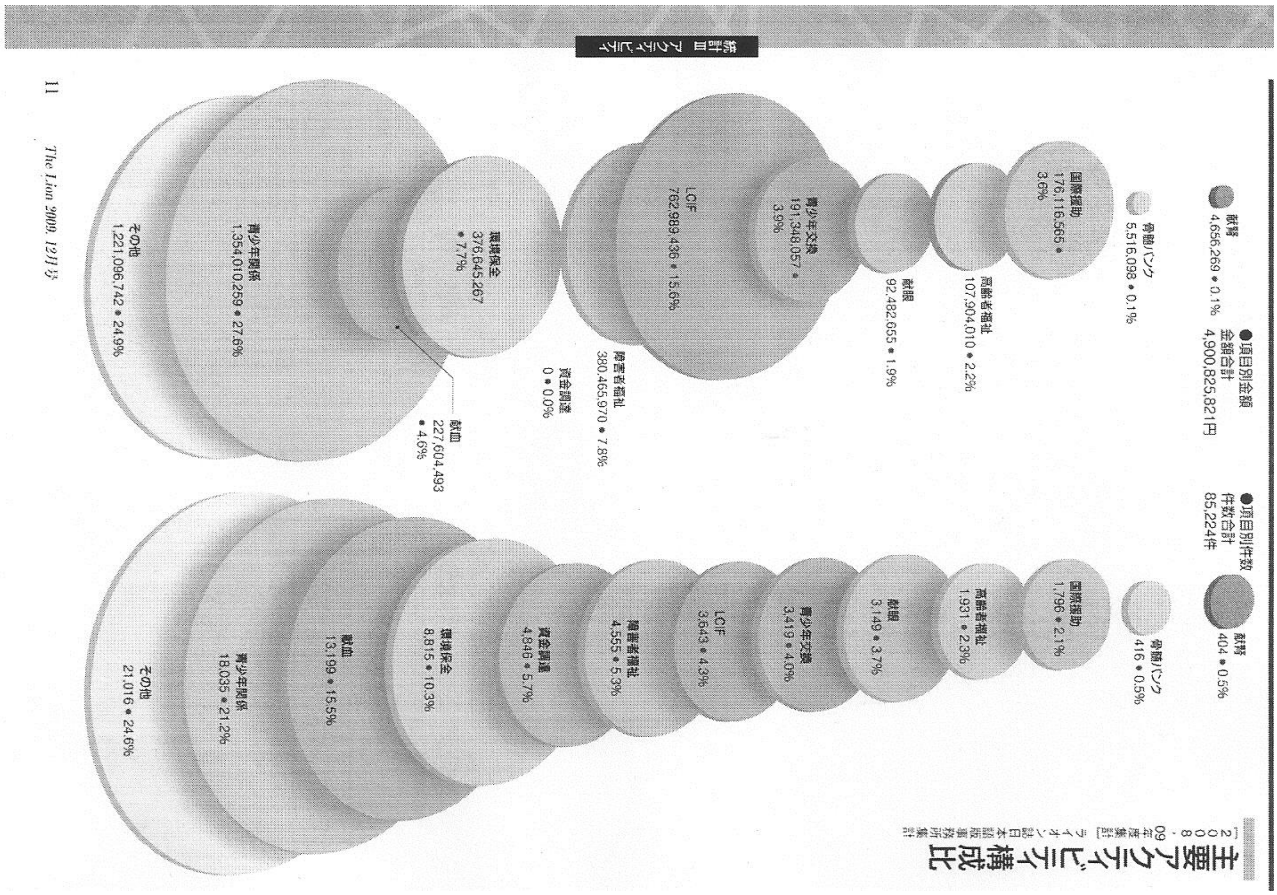
ライオンズクラブ国際協会　献血資料





平成 28 年 11 月　1 日

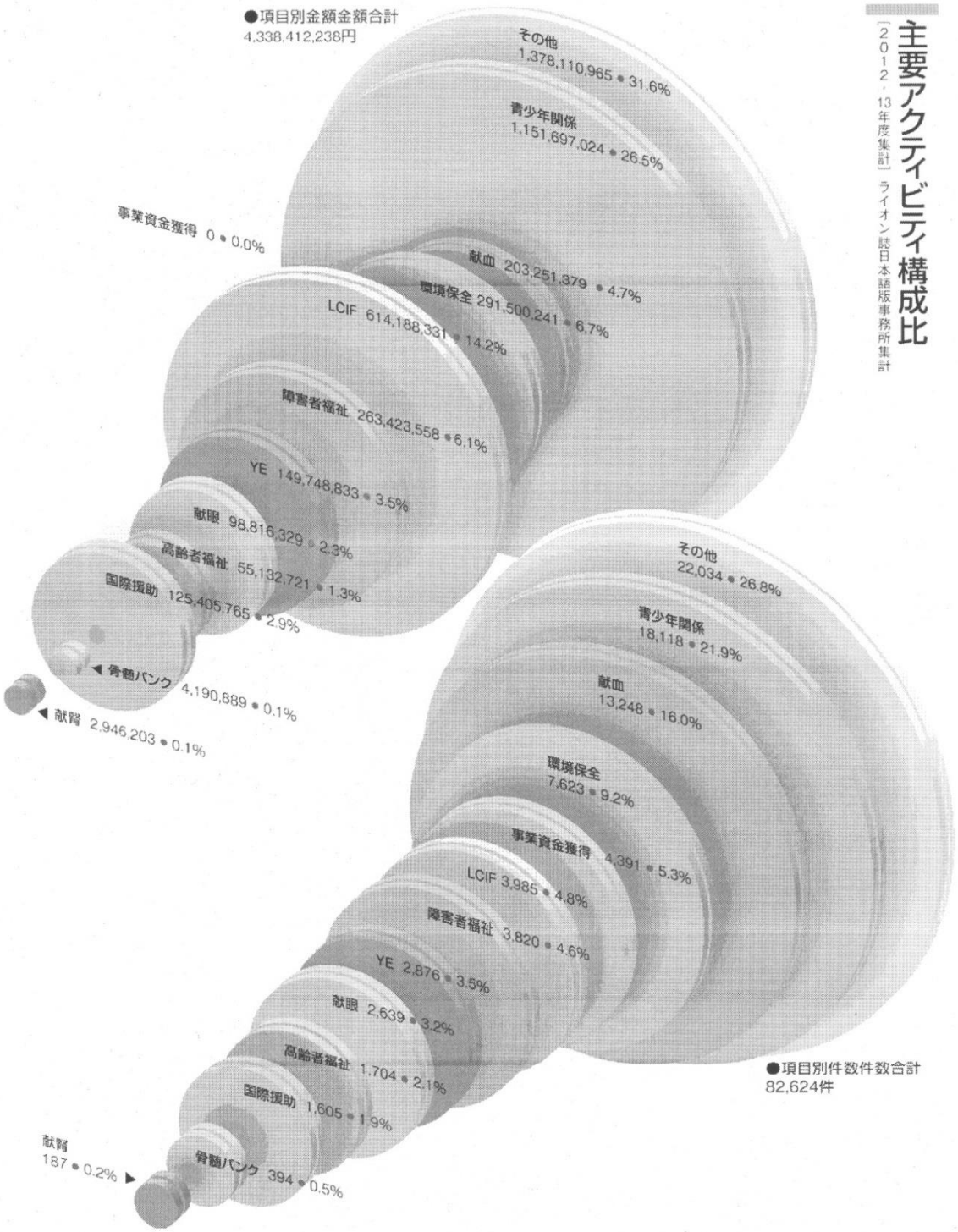

主要プログラム構成比
2009-10年度 ライオンズ国際協会 日本語版事務局集計
●項目別件数合計
83,634件
献血
342 • 0.4%
骨髄バンク
393 • 0.5%
国際援助
1,884 • 2.3%
高齢者福祉
2,046 • 2.4%
献眼
3,112 • 3.7%
青少年交換
3,188 • 3.8%
LCIF
3,996 • 4.8%
障害者福祉
4,268 • 5.1%
資金調達
5,033 • 6.0%
環境保全
8,626 • 10.3%
献血
12,214 • 14.6%
青少年関係
18,307 • 21.9%
その他
20,225 • 24.2%
●項目別金額合計
4,481,492,888円
献血
3,105,153 • 0.1%
骨髄バンク
5,929,754 • 0.1%
国際援助
156,637,360 • 3.5%
高齢者福祉
76,034,681 • 1.7%
献眼
102,406,244 •
2.3%
青少年交換
168,101,113 • 3.8%
LCIF
642,299,401 • 14.3%
障害者福祉
342,440,237 • 7.6%
資金調達
0 • 0.0%
環境保全
360,242,485 • 8.0%
献血
225,975,813 • 5.0%
青少年関係
1,205,511,067 • 26.9%
その他
1,192,809,580 • 26.6%
第四部 クラブ活性化
11 LION 2010年12月号


主要プログラム構成比
2008-09年度 ライオンズ国際協会 日本語版事務局集計
●項目別件数
件数合計
85,224件
献血
404 • 0.5%
骨髄バンク
416 • 0.5%
国際援助
1,796 • 2.1%
高齢者福祉
1,931 • 2.3%
献眼
3,149 • 3.7%
青少年交換
3,419 • 4.0%
LCIF
3,643 • 4.3%
障害者福祉
4,555 • 5.3%
資金調達
4,940 • 5.7%
環境保全
8,815 • 10.3%
献血
13,199 • 15.5%
青少年関係
18,035 • 21.2%
その他
21,016 • 24.6%
●項目別金額
金額合計
4,900,825,821円
献血
4,656,269 • 0.1%
骨髄バンク
5,516,098 • 0.1%
国際援助
176,116,565 •
3.6%
高齢者福祉
107,904,010 • 2.2%
献眼
92,482,655 • 1.9%
青少年交換
191,348,057 •
3.9%
LCIF
762,989,436 • 15.6%
障害者福祉
380,465,970 • 7.8%
資金調達
0 • 0.0%
環境保全
376,645,267
• 7.7%
献血
227,604,493
• 4.6%
青少年関係
1,354,010,259 • 27.6%
その他
1,221,096,742 • 24.9%
第四部 クラブ活性化
11 The Lion 2009 12月号

平成 28 年 11 月　1 日

主要アクティビティ構成比

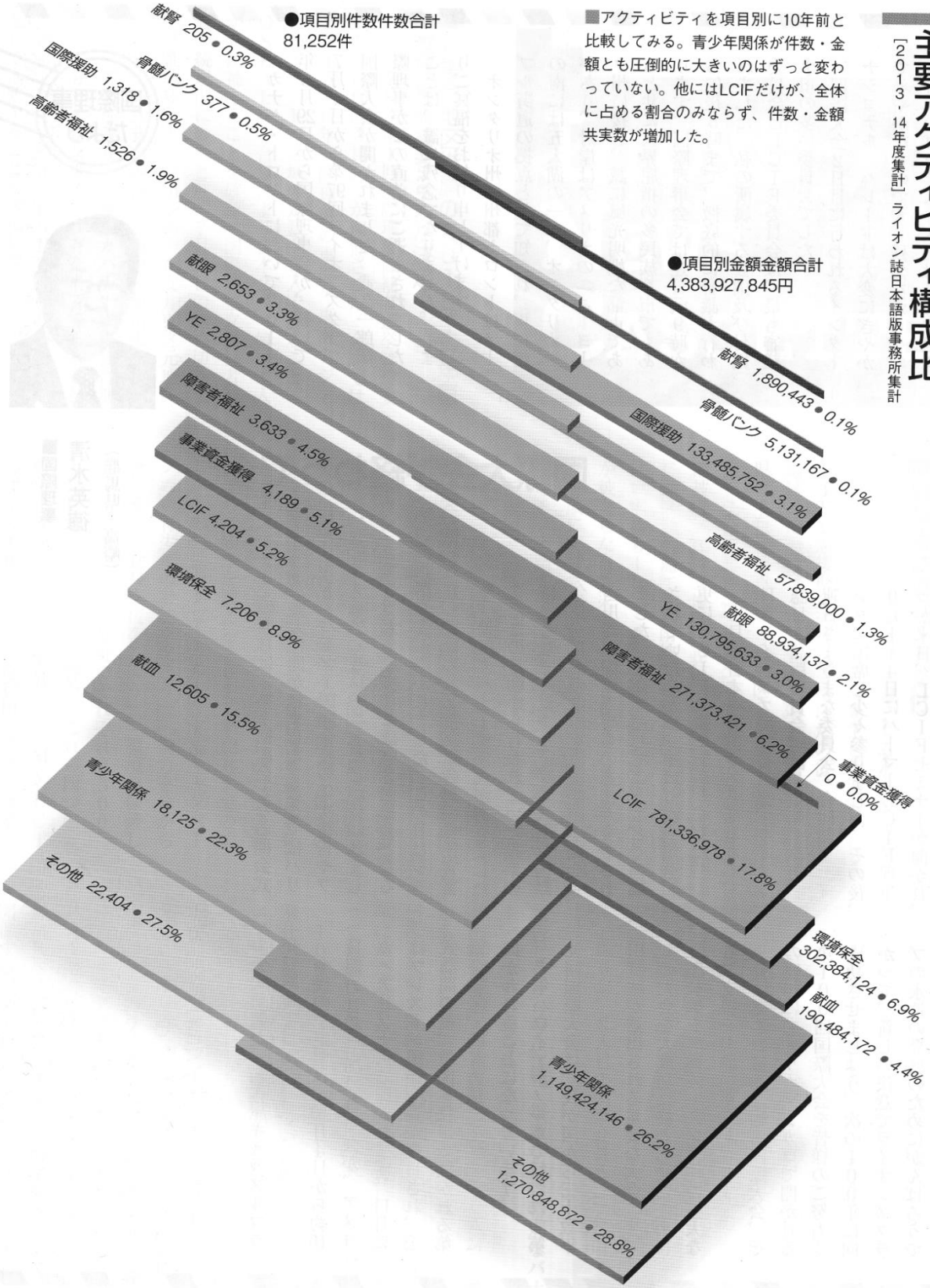
［2012・13年度集計］ライオン誌日本語版事務所集計



主要アクティビティ構成比

［2013・14年度集計］ライオン誌日本語版事務所集計

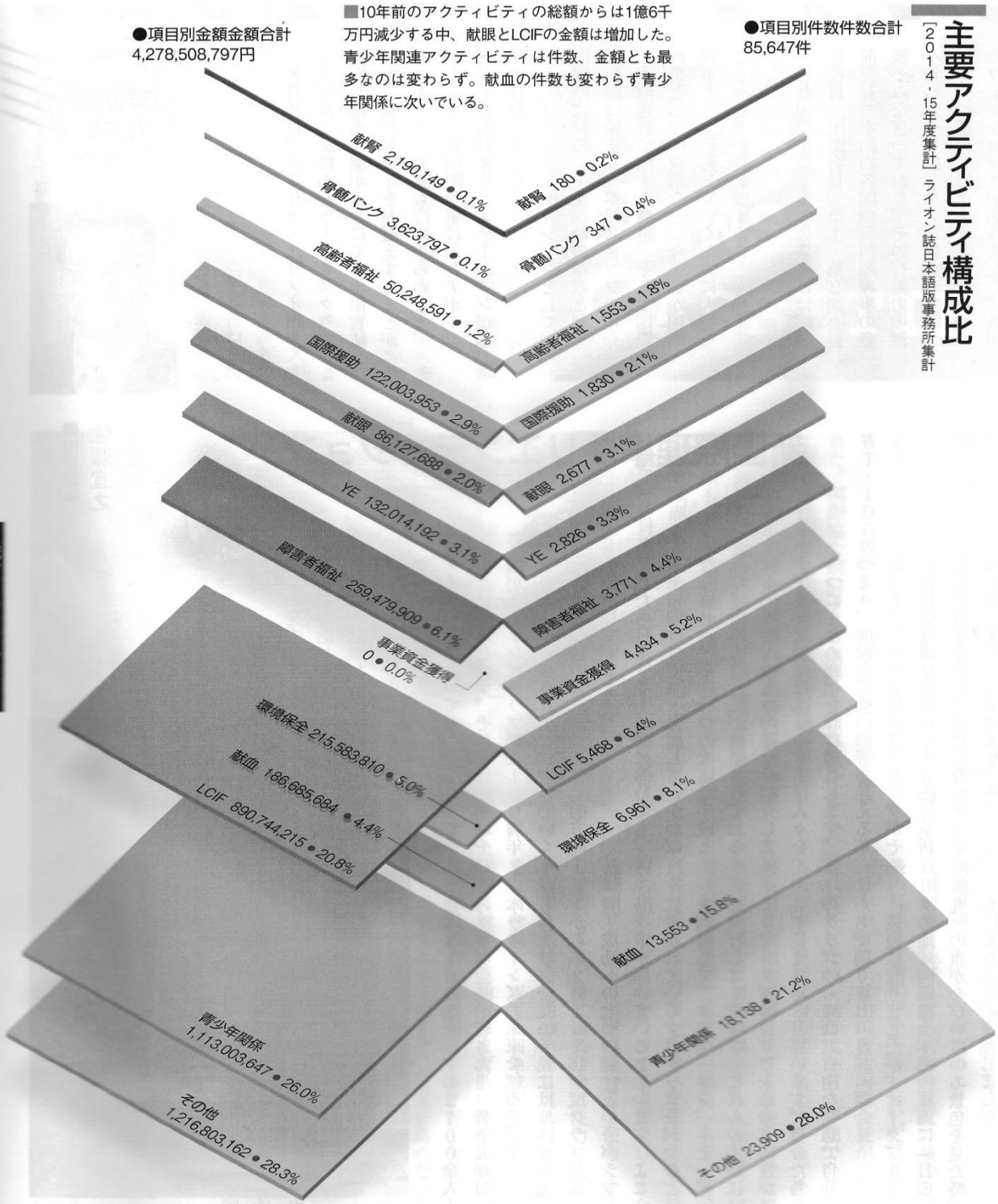
■アクティビティを項目別に10年前と比較してみる。青少年関係が件数・金額とも圧倒的に大きいのはずっと変わっていない。他にはLCIFだけが、全体に占める割合のみならず、件数・金額共実数が増加した。



主要アクティビティ構成比

［2014・15年度集計］ライオン誌日本語版事務所集計

■10年前のアクティビティの総額からは1億6千万円減少する中、献眼とLCIFの金額は増加した。青少年関連アクティビティは件数、金額とも最多なのは変わらず。献血の件数も変わらず青少年関係に次いでいる。

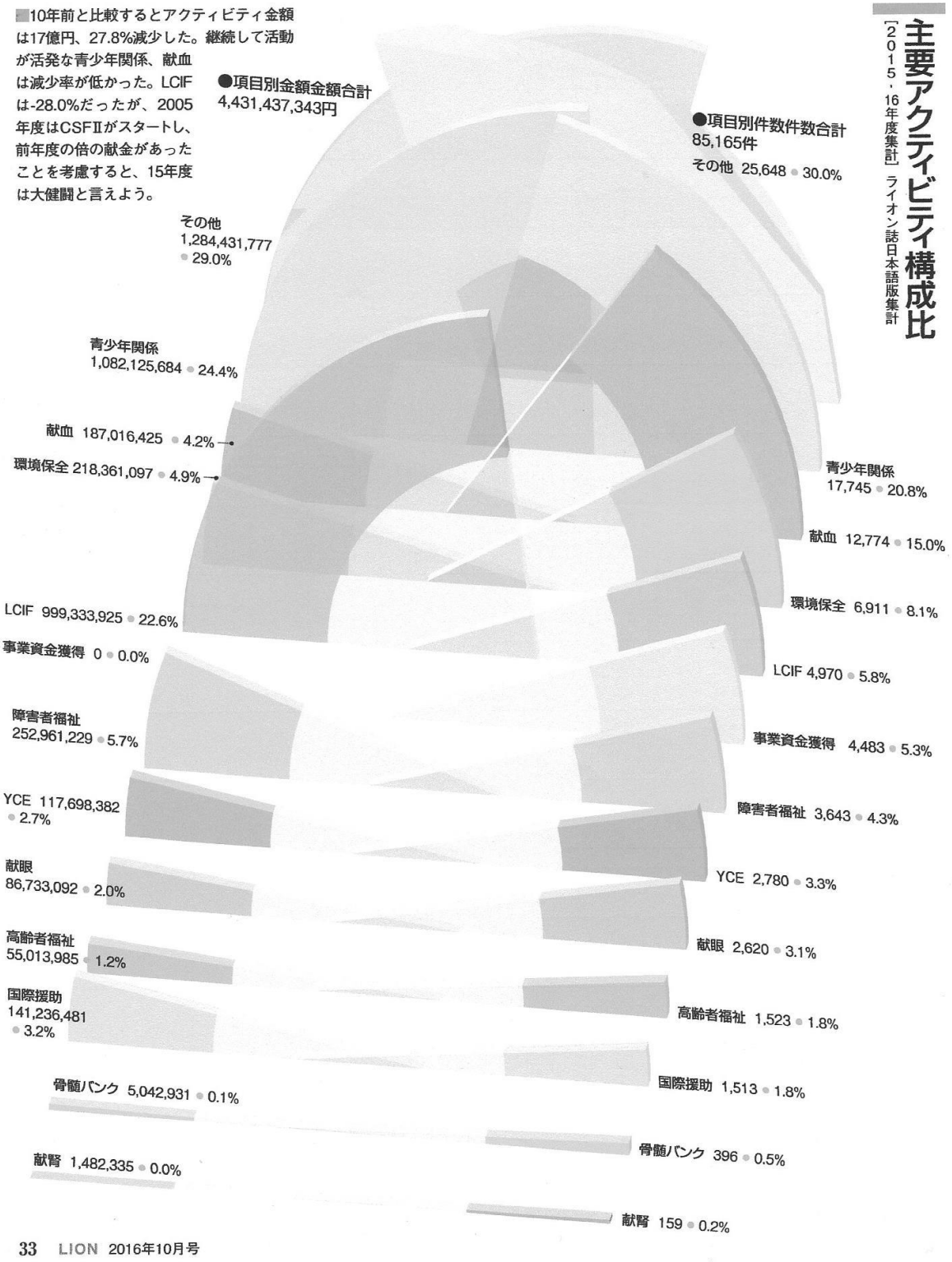


ライオンズクラブ統計

■10年前と比較するとアクティビティ金額は17億円、27.8%減少した。継続して活動が活発な青少年関係、献血は減少率が低かった。LCIFは-28.0%だったが、2005年度はCSFⅡがスタートし、前年度の倍の献金があったことを考慮すると、15年度は大健闘と言えよう。

主要アクティビティ構成比

「2015・16年度集計」ライオン誌日本語版集計



献血アクティビティの 2008 年度～2015 年度推移表　7 月～翌年 6 月＝年度

	2008 年度	2009 年度	2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度	*2015 年度*
献血アクティビティ件数	13,199	12,214	13,328	*12,984*	13,248	12,605	13,553	12,744
年度内構成比	15.5%	14.6%	14.9%	15.5%	16.0%	15.5%	15.8%	15.0%
献血使用事業資金 単位＝円	227,604,493	225,975,813	226,131,446	196,708,337	203,251,370	190,484,172	186,685,684	187,016,425
総事業費内構成比	4.6%	5.0%	3.9%	4.2%	4.7%	4.4%	4.4%	4.2%
献血 ACT 件数×90%×25 人×0.4（400 cc）＝ℓ（類推）	118,791 ℓ	109,926 ℓ	119,952 ℓ	116,856 ℓ	119,232 ℓ	113,444 ℓ	121,977 ℓ	114,696 ℓ
クラブ数	3,337	3,288	3,257	3,225	3,194	3,151	3,126	3,102
メンバー数	108,779 人	105,582 人	103,591 人	101,781 人	100,768 人	113,604 人	121,122 人	120,316 人

上記データはライオン誌日本語版より転載した公式データです。

但し、献血数量は、類推となっております。（下記の通りシビアーな判断をしております。）

献血アクティビティ件数の内 10%は献血を伴わない推進キャンペーンとしておりますが、献血を伴わないアクティビティは実質 5%以下で、本来は 95%以上が献血を行うアクティビティと推測できます。

1 回の採血人数を 25 人とみなしておりますが非常に少ないみなし数です。（自クラブでは概ね 40 人前後です。）

事業資金に関して：日本赤十字社が売血と見なされる事を避ける指導を厳しくされている為に、ライオンズクラブとしても、献血者に対しての対価支払いに成らない様に菓子等提供に抑えておりますので、件数構成比に比べ事業費構成比が少なくなっております。（2015 年度青少年関係は 1,082,125,684 円構成比 24.4%です）

THEME

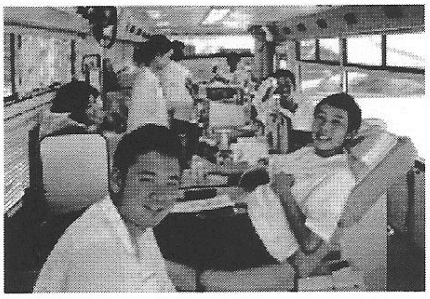
大人の社会科見学

献血編

今日も全国のどこかで、ライオンズが献血への協力を呼び掛けている。命をつなぐために輸血や血液製剤が欠かせない人を助ける献血。提供された血液はどのように必要な人の元へ届けられているのか。日本赤十字社の血液事業の現場を見学する。

福岡県・大牟田中央ライオンズクラブ

大牟田高等学校献血会



日本ライオンズが献血運動を始めて46年。337・A地区は積極的にこれを推進してきた。福岡県内では献血バスと献血ルームで行われ、ライオンズの献血はすべて前者。昨年、一昨年とも、県内の献血バスでの採血全体の4分の1を占めた。

少子高齢化社会により今後は血液製剤を必要とする人が増加する一方、献血可能な年齢層の減少が想定され、より一層の注力が求められている。

今年度は採血基準の改正が施工され、男性は17歳から400ミリリットル献血が可能となった。当クラブはこの機会を捉え、若年層、特に高校生に対する献血の啓発・普及運動を展開していくことにした。

大牟田高等学校は在校生1200有余人を擁し、駅伝、柔道、野球、吹奏楽など各分野で優秀な成績を収めている。同校に申し入れたところ、学校当局もその趣旨を理解し積極的に協力してくださることになった。

第1回献血会を9月6日に実施。爽やかな初秋の日差しの中、9時30分の開始から15分間隔、5人単位で献血バスに入り、予定時間通りの午後3時に終了した。受け付け93人、採血者83人。中でも部活動で活躍している生徒さんが率先して参加してくれうれしく思った。行き届いた学校側の配慮にも会員一同感謝を申し上げた次第である。

第2回は「卒業記念献血会」と銘打って今年2月に予定しており、多数の参加を期待している。

学校当局に次年度に向けて1、2年生を対象とした献血研修会の設定をお願いしたところ、3月に行うことになった。福岡県赤十字血液センターと連絡を取りながら、受講者の啓発と献血の普及に努めていくつもりだ。

（幹事／萬矢勝保）

大阪府・八尾中央ライオンズクラブ

河内音頭まつり大パレードに参加

八尾中央ライオンズクラブ（吉本稔会長／53人）が「八尾河内音頭まつりパレード」に参加するようになって10年。今年は当クラブの河内音頭同好会とライオン・レディーに加え、八尾うぐいす、南大阪みささぎ両クラブの友情出演をパックに総勢60人で挑んだ。

8月28日、先頭にクラブ旗、そしてメーン事業である薬物乱用防止のタスキと横断幕をひっさげ、マスコット・キャラクターのライオンマン、「ダメ。ゼッタイ。」子ちゃんも加えてエントリー。5時20分、いよいよ我がクラブの出番だ。気合いを込めて全員で「ウォー」と一声、元気よくパレードに繰り出した。今年は東日本被災地復興チャリティー・イベントも兼ねており、参加者3千人、J:COMの生中継もある。躍動感あふれる河内音頭の調べに、自然と八尾の夏が盛り上がる。

約40分の道中に、沿道の観客、知り合いの皆さんから温かい応援の声や拍手を頂き、踊りも一糸乱れず？無事ゴールした。マスコットもたくさんの子どもたちから握手をねだられ、テレビ・クルーにも撮られ大人気だった。

実を言うと連日30度を超す猛暑でメンバー誰もが着ぐるみを着るのを尻込みする中、何と若手メンバーのご子息（中学2年生）が「僕、ライオンズのためやったら『ダメ。ゼッタイ。』子ちゃんをかぶります！」。ライオンマンは事務局員が引き受けてくれ、大いに感謝!!　今回のパレードも大成功を収めることが出来た。

「よかったなぁ！」「来年もやりまっせぇ！」。この元気と笑顔が被災地の皆さんに届けばエエなぁと思いつつ、「ウィ・サーブ」でビールの乾杯。良い汗をかき、良い気持ちで、良い奉仕が出来たと全員満面の笑みだった。

（設営・PR委員長／野勢昌彦）

334-D地区第1ゾーン第2ゾーン（富山県）

ホクリクサンショウウオのビオトープを守れ

第2ゾーンの7クラブ（富山セントラル、八尾婦中、富山神通、大山、富山西、富山昭和、富山いきいき）は、新年度当初に開催される恒例のゾーン会長・幹事会で、今年のライオンズ・デーはゾーン合同で奉仕活動に取り組むことを決議した。

富山西ライオンズクラブの田畑裕二会長から「ホクリクサンショウウオ（絶滅危惧種）の生息地が危ない」という情報を提供頂いたことがきっかけとなり、戸田治ゾーン・チェアパーソンの取りまとめの下、日本で唯一、里山を有する動物園・富山市ファミリーパーク内にあるトンボの沢で、大雨などで堆積した泥の泥上げを行うことになった。

当日の10月8日は暑くも寒くもない肉体労働に絶好の天気。7クラブからの選抜メンバー77人がスコップとバケツを手に、疲れも忘れ心地よい汗をかいた。

参加メンバーの感想を紹介しよう。

「久しぶりの動物園でルンルン気分で作業を始めた私たちに、後悔はじきにやってきました。が、いつ果てるとも知れぬ作業の中、ドロドロになりながらも、次第に爽快感と童心に返るような懐かしさを感じ始めたのです。そして体感とは、思考を超えて事実を実感することだと気付きました。奉仕も『百聞は一験（経験）に如ず』、体感以外では生まれないことに改めて気付いたことが、何よりも大きな収穫でした。来年はぜひ、この感動を他の人にも味わってもらいたいと思います」

今回のアクティビティは皆の努力があって、成し遂げることが出来た。キャビネットの環境事業方針「地域にビオトープを作ろう」にも合致し、市民の憩いの場の環境整備も出来るすばらしい事業となった。

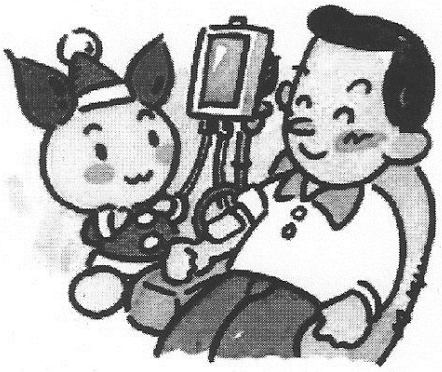
（地区委員／長江正憲）

332-F地区第1ゾーン第1ゾーン、第2ゾーン第1ゾーン・第2ゾーン（秋田県）

クリスマス献血キャンペーン実施

12月3日、4日の両日、第1ゾーン第1ゾーンと第2ゾーン第1及び第2ゾーンの秋田市周辺の16クラブは合同で、JR秋田駅前のアゴラ広場で「クリスマス献血キャンペーン」を実施した。血液が不足する冬場に献血を呼び掛けようというこの企画は1984年から続いており、今回は2日間で99人の市民らが献血してくれた。

県赤十字血液センターによると、県内は少子高齢化の影響などで獲得出来る献血量が減少しているのに加え、12～3月は風邪で体調を崩したり、雪でバスが運行出来なかったりするため更に献血者が減るのだそうだ。1週間当たり約50人分の血液が不足しているという。



我々は献血の看板を掲げて道行く人たちに協力を呼び掛けながらティッシュペーパーを配り、また採血を終えた方たちには、お礼のお菓子をプレゼントした。

県赤十字血液センターの担当者からは「ライオンズの協力がなければ成り立たない」と感謝されている。血液を必要としている患者さんはクリスマスも病気と闘い、血液を待っていると聞き、この活動の必要性を強く感じる。これからもより多くの人が献血に協力してくれるよう呼び掛けていきたい。

（秋田中央ライオンズクラブ会長／浜野正）

Chicken Soup for the Soul

こころのチキンスープ●ライオンズ編

血液は命だった

構成／青山研

深く愛する者は、忘れるのも遅い。

――シャンソン十三世紀写本――

「血液について私には悲しい思い出がございます。今から三十年前……」

今年七十二歳になる岡本崇さんは、穏やかに話し始めた。岡本さんが、三十九歳の年のことであった。可愛い女の赤ちゃんに恵まれた。働き盛りだった父は、幸せに美しくあれと願い、「幸美」と名づけた。赤ちゃんは両親の愛をいっぱいに受け、すくすくと育った。

幸美ちゃんが二歳になった時のことだった。ぽつぽつおいたをするようになり、元気に育っていた。ある朝、おむつがピンクに染まっていた。血尿だったらしいが、翌日はもう何ともなく、愛らしく笑っていたので、両親はつい気を許した。ある朝、お腹が膨れていることに気づいた。触ってみると、何か固いしこりに触れた。医師に診せると、思いもかけぬ診断が待っていた。

「腎臓ウイルムス腫瘍です。小児がんの一つです」

青天の霹靂という言葉がある。衝撃であった。この子が、どんな悪いことをしたというのか。家族の愛情をいっぱいに受けているこの子が、なぜ、がんなのだ。父も母もそう思った。家族の不安を打ち消すように医師が言った。

「腫瘍を摘出すれば、元気になりますよ」

医師の言葉を信じた。幸美ちゃんは、左腎臓摘出の手術を受けて退院した。元気だった。医師の言葉通りだった。だが、それはつかの間の日差しでしかなかった。病魔は転移していた。腹部リンパ腺に再発して再び入院し、抗がん剤を使った治療が行われた。

幸美ちゃんの病状はやや落ち着いたように見えた。薬のせいか入院前より少しやせた幸美ちゃんは、皆が待つ家に帰ってきた。少し大人しくなったように思えた。幸美ちゃんを中心に、一家に前のような暮らしが戻ってきた。でもだれも口にはしなかったが、いつ再発するかしれないという不安が一家を覆った。不安が現実となり、幸美ちゃんはわずか三カ月の間に三度目の入院となった。

父と母に、悲しくつらい日々が過ぎた。放射線治療と抗がん剤投与で、幸美ちゃんは髪の毛や眉毛、まつげまでもが抜けた。副作用で白血球や血小板が破壊され、鼻や歯茎からも出血し、食事ものどを通らなくなった。治療には新鮮な血液を輸血するしかない。調べたら、幸美ちゃんの血液型は何百人に一人という「RHマイナス」だった。

保健所に協力を頼み、父は、見知らぬ人にお願いに伺った。快く承諾してくれた人の血液を病院まで運んで調べた。引き合わせということがあるのだろうか。幸美ちゃんの血液と適合する同じ型だった。その同じ型の血液の人も宿命を感じたのだろう。迎えの車に乗って、遠い奈良県の病院までかけつけてくれた。

輸血した血液は二〇〇ccなのに、青白かった幸美ちゃんの頬や唇に、紅がさした。ぽつり、幸美ちゃんがつぶやいた。

「お腹が空いた。何か食べたい」

血液は命だった。父は胸が震えた。涙があふれ止まらなかった。名の通り我が子が美しく見えた。その日から幾度か、幸美ちゃんは愛の輸血をもらいながら立ち直り、立ち直りしながらも次第に衰弱していった。三歳三カ月の日、幸美ちゃんは短い命を終えた。

父は和歌山の南部印南町に明治末から続く肥料商だった。付き合いのある人々が後から後から会葬に訪れた。だれもが、子に先立たれた父母の悲しみの深さを知る人々であった。

思い出に浮かぶのは、元気だった日の我が子の笑顔だった。父には、あの輸血の日、赤々とよみがえった頬の幸美ちゃんの声が忘れられなかった。その日の感謝の思いを、会葬者の志も加えて、血液センターに贈った。父の志は献血を運ぶ車となり、「幸美号」と名づけられた。真っ白なボディーに赤十字のマークを付けたライトバンだった。

「幸美号」は、贈られたその日から献血を運んで活躍しだした。父と母は、その日から自らも献血に協力していった。四年後、御坊ライオンズクラブに入会した父の献血は二十六年間続き、献血本数は百四十八本に及んだ。献血運搬車の寄贈も続けられた。「幸美号」は四号車にまでなって、近くの田辺血液センターに配属された。父も母もその白い姿に街で出会うことがある。父には、赤色灯を回して走り去るその姿が、幸美ちゃんが励ましてくれているようにも見える。

「お父ちゃん、お父ちゃん、まだまだだよ、頑張ってねエー」

「幸美、お前も、頑張れよ。気をつけてなア！」

心で答える父のまぶたに浮かぶ幸美ちゃんは、幼くふっくらと元気だった。あのころそのままの姿で笑っていた。

イラスト／吉田悦子

Chicken Soup for the Soul

こころのチキンスープ●ライオンズ編

茶髪さん献血奉仕にトップ切り

構成／青山研

人は店屋では品物を入念に吟味するが、人間のこととなると、外見で判断する。

——アリスティッポス——

どなたでもそうかもしれませんが、ぱりっとした仕立ての良い洋服をお召しになった紳士を拝見しますと、さぞかしお人柄も高潔な方だろうと、つい思ってしまいます。たしかにそういう方もいらっしゃいますが、見かけ倒しと申しますか、見かけによらぬと申しましょうか、がっかりさせられる方も中にはおられます。人というのは分からぬものだな、と思う今日このごろでございます。

私たち、千葉県の船橋シニア・ライオンズクラブは毎月第四木曜日に、JRの船橋駅前に十人ぐらいで立ち献血の呼び掛けをしております。私たちのクラブは八年前、第一線を退いたメンバーを中心に結成いたしました。クラブには初代会長をされた方が九十五歳でご健在でいらっしゃいます。初代会長ばかりでなく、皆さんとても元気です。

船橋なんてどこの田舎かとお思いかもしれませんが、船橋駅は千葉県でも一、二を争う大きな駅なのです。いいえ、別に駅の自慢をしているわけではございませんが、駅の周りは東武デパート、西武デパート、そのほか高層ビルが立っておりまして、陸橋が駅前広場をまたいで広がり、バスターミナルからは四方へバスが発着しております。この駅の乗降客が一日に二十七万人ということです。毎回、そんなところで、献血を呼び掛けているのでございます。

そんな大きな駅ですから、私たちの前をずいぶんといろいろな方がお通りになります。

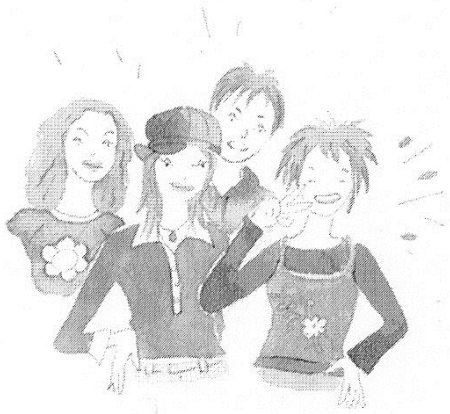
私たちがマイクで呼び掛けている時間は、午後二時から四時までございます。通りかかる人も、予備校生や、専門学校生、高校生、お勤めのお嬢さん、時間を持て余していらっしゃる様子のご婦人、リタイアしたらしい年配の紳士、忙しそうなサラリーマンの方など、まあとにかくいろいろでございます。

もちろん服装もいろいろで、まるで展示会のよう。ベルトから金色の鎖を下げてズボンのポケットまでつなげた、派手なシャツの二十歳前後の若い男性、アクセントの強い厚化粧で髪を栗毛色に染めた女性、あるいはまた、普段着でツッカケを履いたご近所の人、仕立ての良い背広で、さぞかし昔は一流企業のお偉方だったかしらという方、好みの良い装いで何のご苦労もないだろうと思われるご婦人、数え上げればきりがございませんが、こちらの呼び掛けにこたえてくださるかどうかは、服装とは関係ないようでございます。

ある時、去年のことでしたが、予備校生らしい若い方々が五、六人、にぎやかにエスカレーターから降りて、私たちの方に近づいていらっしゃいました。

「あいつ、超ムカツクんだよッ」とか、「まじかよ、てめー」と、何だか分からないことをしゃべっていて、服装は派手、頭は茶髪だしで、正直ちょっとこわいなと思いました。それでも、思い切って声を掛けてみたのです。

イラスト／吉田悦子



「献血、お願いしまアす！」

そうしましたら案の定、「うるせえなあ」という感じでじろりとこちらを見まして、「これはだめだわ」と思った瞬間でした。一人の子がそっぽを向いているほかの子に言ったのです。

「おメエら馬鹿かよ。おばさんがこんだけ熱心に話してるのに、話、聞けねエのかよ！」

全員が立ち止まって、こちらを向きました。

「今日という日の思い出に皆で献血しましょう。長い人生で、今日という日はたった一日ですよ。いつか社会に出て再び出会った時、あの日、六人そろって献血したっけって、良い思い出になりますよ」

すると、その若者たち、こたえてくれたんです。

「おう、やろぜ、皆で！」

献血に応じてくれる方は、意外に茶髪さんとか、服装が乱れてるなアという若者が多いのです。

「おばさん、年寄りなのに偉いね」

「一生懸命呼び掛けてるけど、どうして？」

と、話しかけてくれる子もいます。私たちの呼び掛けに目を合わせてくれて、その日がとっても優しいのです。人は、服装や風体で判断してはいけないのですね。

私たち、平均年齢七十三歳。今年も船橋の駅前に立ち、皆さんに献血を呼び掛けております。

ライオンズクラブ国際協会　献血資料

獅子吼

が、そこには角膜の情報はない。献眼・献腎も医学上問題がなければ当然なされているとは思うが、長年アイバンク運動に携わらせて頂いた身にはなんとなくやりきれない。臓器移植法がその原因の一つであったなら、3献運動を柱としてライオンズ・ライフを過ごして来た者にとっては本当に嘆かわしい。「アイバンク運動」はほとんど死語に近く、迷子になっているような錯覚すら受ける。もちろん、これはあくまでも私の主観であり、また、私にとってアイバンク運動が柱であることに変わりはない。

一般の人の中には、ドナーカードを所持していても、どんな病気だったら献眼出来ないのか、医学的見地から厳念とはどういうことなのか、そこまでは理解せぬまま、人様の役に立ちたいと意を決しておられる方、ご家族もおられる。またドナーカード所持だけでは絶対的なものでもない。不幸にしていざその場を迎えられた時、たとえ献眼は出来ないと判断されたとしても、社会の役に立てるのならと献眼を決意された心こそ、崇高な奉仕の精神であったと私は理解する。死を迎え提供を告げられた時点で、既に崇高な奉仕であったと私は信じる。しかし、そこに何の敬意も表されないことに疑問を感じる。なぜなら、医学的に問題がなければ移植出来ていたからである。ご遺体の角膜の使用を断念せざるを得ないとしても、提供しようとした心は移植が無事成功した場合と何も変わらない。遺族が何かを望まれることはない。せめて敬意の証は移植された場合と同じく表されるべきと思う。悲しみのどん底の遺族に献眼を呼び掛け、結果出来ないとの判断を伝える。医者の言い方もあるが、悲しみに追い討ちをかけるような事態を私は経験した。

個人としてはすばらしい決断をされたと敬意と称賛の気持ちは伝えたが、移植医療を推進する機関なり厚生省なりが表すべきことではないだろうか。今わの際まで「頼むぞ」と言った本人と、自分の命が途切れた時には「頼むぞ」と依頼を受けた遺族に対して、移植が出来た出来ないは関係なく、同じ敬意を払うべきである。子や孫にこんなに立派だったと語り継ぐためにも……。

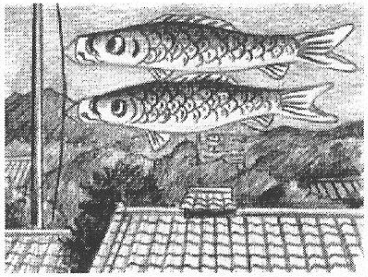
ライオンズクラブ活動と我が献血人生

木本　正樹（福岡県・北九州シニア）

北九州シニア ライオンズクラブではここ12～13年来、各区市民センターで開催される市主催の「ふれあい昼食交流会」に「バナナの叩き売り」で参加し、お年寄り並びにセンターの職員さんに感謝されています。当クラブ10周年記念事業では各センターにフードプロセッサー41個を贈呈しています。また、自衛隊小倉駐屯地や小倉・魚町献血ルーム前での献血の呼び掛けや、他クラブとの合同献血等を実施し、献血活動では毎年ライオンズクラブ表彰を受けています。この他にも、霧が丘の「忠霊塔」清掃など、平均年齢73歳なりに、各種の社会貢献活動をしています。

また個人としては、長年献血を継続して来ました。最初の献血は大学生の時でした。昭和39年に大阪市立大学に入学。同時にワンダーフォーゲル部に入部した直後、ある家族が新聞で献血のお願いをしていました。

当時は売血による供血が多く、これらは「黄色い血」と言われ、品質に問題がありました。大量の輸血を必要とする手術の場合、病院や主治医から献血手帳を集めて必要な血液量を確保するよう要請され、出来なければ手術もすぐにはしてもらえぬ時代でした。



ワンダーフォーゲル部も社会貢献活動をやっていましたので、全面的に協力することになり、30人程が大阪日赤で献血をしました。この昭和39年6月8日が、私の献血第1回となりました。

この年、アメリカのライシャワー駐日大使が、暴漢に襲われ刺されるという事件が起き、一命は取り留めたものの、手術の際の輸血がもとで肝炎を発症してしまいました。大使は大変な親日家で、大騒ぎしないよう日米両国に表明されたそうですが、場合によっては深刻な二国間関係になるところであったと聞いております。

この事件により、当時の厚生省も重い腰を上げ、同年8月、政府は「献血の推進について」閣議決定を行い、この10年後には献血100%を達成。現在、売血は完全に禁止されています。

その後、私は昭和62年に部下を急性骨髄性白血病で失いました。入院期間中の面会は奥さんと私だけに限られ、本当の病名も人事部長、診療所長限りとし、本人始め周りには、にせの診断書を作成してもらい、「再生不良性貧血」で押し通すという大変な1年間でした。

このことが、定期的に献血をする動機付けになりました。

2、3年前、県とライオンズクラブ、並びに市区町村献血推進関係者を対象に、合同研修会が開催されました。その折、急性骨髄性白血病を発症した長崎のお子さんの闘病記録を視聴し、お母さんのナレーションに涙を禁じ得ませんでした。その後、これを当クラブの例会でメンバー全員に視聴してもらい、改めて献血の必要性を認識しました。

日赤本社から要請がありABO、RH以外の項目すべての型を登録しておき、適合者の手術がある時、日赤本社で献血したことも何度かありました。370回達成時、長洲一二神奈川県知事から表彰を受けました。平成23年4月3日には、337・A地区の年次大会が、北橋健治北九州市長ご臨席の下、北九州メディアドームで開催され、「ライオンズクラブ国際会長表彰」を受賞しました。

本誌が発行される頃には、通算48年間で750回の大台に達する予定です。

現在67歳ですが、今後も2週間に一度、成分献血を継続し、献血可能な70歳の前日まで健康に留意して、献血800回を達成出来るようがんばりたいと思っています。

333-C地区

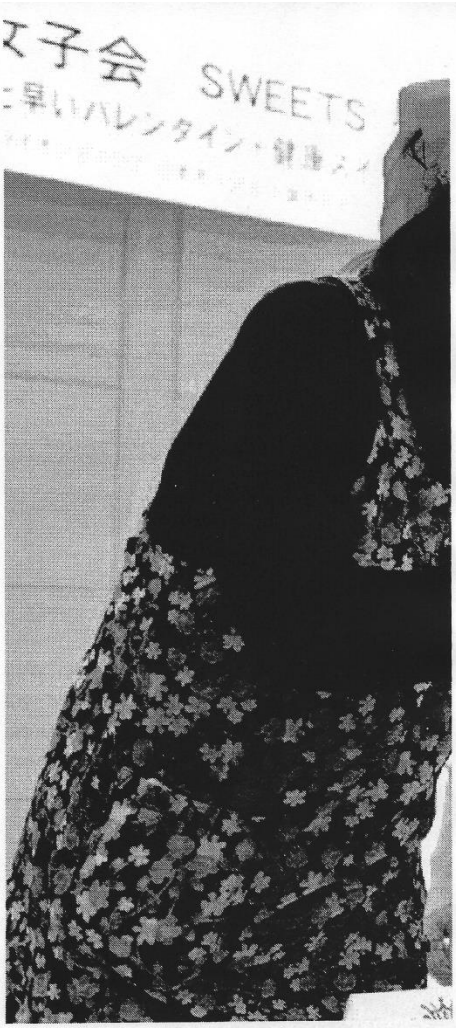
千葉ゆうきのライオンズクラブ

貧血にならない身体を作る 驚きの食材を使った料理教室

1月20日、千葉みなと駅に近いホテルポートプラザちばの2階で、千葉ゆうきのライオンズクラブ（岩本朝子会長／23人）が日本赤十字社千葉県支部、成田赤十字病院、千葉県赤十字血液センターと主催した「献血女子会SWEETSクッキング!!チョコっと早いバレンタイン＋健康スイーツで献血にGO！」が行われた。この事業は千葉ロッテマリーンズに協力してもらっており、当日はトークショーを兼ねた試食会に内竜也投手がゲストで参加することになっていた。球団ホームページなどでもPRをしてもらっていたため、マリーンズファンの女性も多数応募。定員50人に対し、100人以上の申し込みがあった。

この献血女子会、実はこの日に献血をするわけではない。献血出来る健康な身体を作るためのお菓子作り教室だ。

千葉ゆうきのライオンズクラブは結成当初から献血協力をしてきた。だが、ある問題に心を痛めていた。それは、献血したいと申し出てくれた人から採血出来ないケースが多いことだ。千葉県赤十字血液センターによると、千葉県内で献血に参加してくれ



（上）千葉ロッテマリーンズの内竜也投手は、参加者との記念撮影などで交流
（下）参加者が記念撮影をしている間はライオンズのメンバーが料理の番

る人は2012年度で約30万4千人。が、5万1千人が献血出来ないという。一番の原因は、低ヘモグロビン量。一般に貧血と呼ばれる症状だ。献血が出来ない原因の約半数を占めており、特に若い女性に多く見られる。そんな中、持ち上がったのがこの献血女子会。チャリティー・ディナーショーの獲得資金で実施された。

当日、参加者はグループごとに作業をする。この日のメニューはチョコレートケーキとクレープ。一見、普通の料理教室のように感じられるが、テーブルの上には卵やチョコレートに混じってひじきやゴボウが置いてある。これらを使うことで体内に鉄分を取り入れられ、貧血に強い身体が作れるという。

実演はホテルボートプラザちばのパティシエ高橋健治さん。説明を交えながら手際よく作っていく姿を、参加者は時折メモを取りながら真剣に見ていた。

そしていよいよ、自分たちで調理をスタート。参加者たちはレシピを基に協力して作り上げていく。次第にこの日初めて会った人同士にもコミュニケーションが生まれていった。途中、内竜也投手がサプライズで登場するなど、終始参加者の笑顔が絶えない料理教室となった。

千葉ゆうきのライオンズクラブでは今後もこの事業を継続していくつもりだ。人々のライフスタイルが変わってきている中、ライオンズクラブならではの方法で健康な身体作りの手伝いをしたいと考えている。

（取材／井原一樹　撮影／関根則夫）

334-D地区

富山東ライオンズクラブ

献血イメージアップ オリジナル献血推進曲の制作

富山東ライオンズクラブ（37人）は1月13日、買い物客でにぎわうショッピングセンター「ファボーレ」内で献血イメージアップ及び推進活動を実施した。事業の目的は若年層の献血離れによる慢性的な血液不足解消をアピールすると共に、当クラブの活動を広く知ってもらうこと。

今年度、当クラブはオリジナル献血推進ミュージックCDを製作した。これは県内のミュージシャンが集結し、リレー方式で歌い上げたもの。

当日はこのCDを献血のPRに活用してもらえるよう、富山県赤十字血液センターへ500枚贈呈した。また、参加ミュージシャンへの感謝状贈呈や、ライブコンサート、そして来場者先着100人へのCDプレゼントなどを行い、同時にライオンズクラブ活動への理解を呼び掛けるチラシを全員で配布した。これらの活動によって献血に対するイメージが明るいものになったのではないだろうか。

CDは全国の血液センターに贈られることになった。今後、全国の献血活動でこのイメージソングを大いに活用して頂くことで、献血に協力してくれる方が増えればうれしい。

また、今回のイベントによって富山東ライオンズクラブの活動のみならず、ライオンズクラブに対して、今まで以上に市民の方に理解を深めて頂けたなら幸せだ。

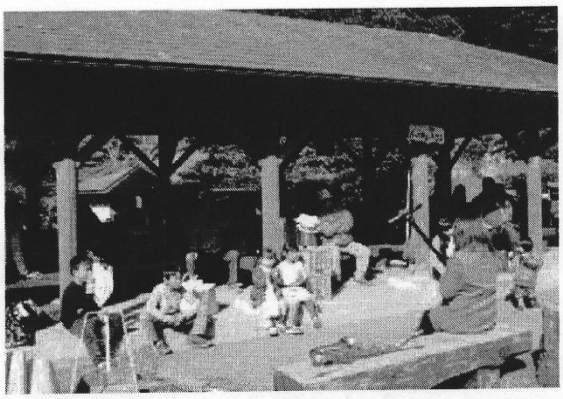
後日、県内ラジオ放送局から、「今お薦めの歌」としてこの歌を流したい、という連絡があった。この歌が末永く愛されていくことを心から願っている。

（会長／柳瀬敬）

337-B地区

宮崎県・都城ライオンズクラブ

三世代紅葉ウォーキング例会 内容充実で会員増強を目指す



2013年11月23日、都城ライオンズクラブ（持永忠志会長／34人）は紅葉例会を実施した。これは家族親睦例会として計画。家族会員を含めて三世代でウォーキングをし、親睦を深めた。

ライオンズクラブの活動には家族の理解と協力が欠かせない。そこで年に2回家族親睦例会を計画し、内容も工夫を凝らした。

うっすらと霜が降りる冷たい朝だったが、1歳から73歳までの三世代が参加。小川のせせらぎを聞き、コケむした石と紅葉を見ると、日頃の疲れが癒やされるようだった。それぞれの体力に応じて1～2時間を歩き、昼はバーベキューを行った。費用はほとんどが会員ドネーションによるものだ。

遊具がたくさんある広場では汗びっしょりで飛び回る子どもたち。それを見守る会員は父親や祖父の顔だった。最後には会員の知人が三味線を演奏してくださるなど、アットホームな雰囲気で大変盛り上った。

講師を呼んで会員増強の勉強会をするのも一つの方法だが、息が詰まるような例会になってしまっては逆に出席が減り、退会へつながってしまう。都合で来られなかった方が残念がるような例会になれば成功だと考え、この親睦例会では「ぜひ次は自分も参加しよう」と思えるようなものを心掛けている。

12月には都城市交通少年団と飲酒運転根絶運動、ガールスカウトと歳末助け合い活動を実施した。当クラブでは家族を連れて気軽にボランティア活動に参加出来るようなライオンズクラブを目指している。

（計画委員長／江藤博明）

334-A地区

愛知県・津島ライオンズクラブ

「特別じゃない 私はふつう」佐野有美さん大いに語り歌う！

2012年12月9日、津島ライオンズクラブ（69人）は青少年健全育成事業の一環で「佐野有美さん講演とミニライブ」を主催した。1100人のお客さんが詰めかけ、津島市文化会館大ホール前には長蛇の列が出来た。

愛知県出身の佐野有美さんは先天性四肢欠損症で、あるのは短い左足と3本の指のみ。しかし彼女は豊川高校でチアリーディング部に所属し「車椅子のチアリーダー」として注目されたのを始め、あらゆる分野で活躍した。そんな彼女を取り上げたテレビ番組を見ていた石井利一会長と私は、逆境に負けず果敢に生きる有美さんと、献身的なご両親の姿、そして多くの友達の友情にいたく感動した。そしてこの感動を多くの人々と分かち合いたいと講演をお願いした。

オープニングは友情出演の清林館高校チアリーディングチームが華麗な演技を披露。その後、特別な電動椅子で登場した明るく可愛らしい笑顔の有美さんには、会場から割れんばかりの拍手が送られた。生と死と闘った22年間を、有美さんは明るい笑顔で語られ、会場からは笑いと、時折すすり泣く声が聞こえた。次は日本レコード大賞企画賞に輝いた有美さんのミニライブ。その澄みきった歌声が会場に響き渡った。清林館高校チアリーダーが有美さんを囲んでのエンディングに観客は総立ちだった。「ありがとう、良かったよ」「勇気をもらいました」と、会場を後にする人々の声に、今期最大のアクティビティを成し遂げた充実感か、見送りに立つ石井会長の目は心なしか潤んでいた。

（幹事／長尾昌和）

333-B地区

栃木県・宇都宮ライオンズクラブ

我がクラブの奉仕活動

宇都宮ライオンズクラブ（菅谷文利会長／27人）は今年度、52年目の活動に入った。そこで昨年末の活動を歴史を交えて原稿にすることとした。

2012年10月6日には栃木県立衛生福祉大学において「献血支援」を実施した。当クラブの献血支援活動は1981年に行った市内ライオンズクラブ合同献血会に始まる。その後、献血事業をスタートさせ、30年が経過した。86年には市内のオリオン通りに常設の献血ルームが開設され、当クラブはその前で献血推進事業を行った。これはこの献血ルームが2004年、宇都宮大通りに「うつのみや大通り献血ルーム」として移設されてからも、継続している。また、02年からは栃木県農業大学校、栃木県立衛生福祉大学校においても献血推進事業を開始した。このように、献血奉仕事業はクラブ内で継続アクティビティとして定着している。

10月7日には宇都宮市二荒山神社前で「赤い羽根街頭募金」を実施した。12月9日に実施した歳末助け合い街頭募金と共に、48年間継続している。県内のライオンズクラブでは当クラブが唯一実施しているもので、栃木県知事から表彰状も頂いた。

10月27日には「第10回うつのみやふれあいスポーツ大会」を後援した。この大会は障害者の方を中心としたスポーツ大会で、今年は956人が参加した。当クラブでは参加者全員にお弁当とお茶を配布提供している。前身の知的障害者スポーツ大会から数えて今回で22回目の継続奉仕である。

（PR情報委員長／坂本竹男）

333-C地区

千葉県・上総ライオンズクラブ

東日本大震災被害の旭市に黒松の苗木50本と支援金寄贈

3月10日、上総ライオンズクラブ（月崎和雄会長／45人）の環境保全委員長であるライオン石橋英男を始めとした4人は千葉県の旭ライオンズクラブを訪問し、加瀬朝壹会長ら3人に出迎えてもらった。旭市は東日本大震災の津波で大きな被害を受けた地域であるため、当クラブからは黒松の苗木50本と支援金5万円を寄贈した。

ライオン石橋は「明日の3月11日で、あの大震災から満2年が経ちます。旭市は津波による被害で海岸の黒松の多くが枯死しました。今日は黒松の苗木を持参しましたので、適した場所に植えてください」とあいさつ。加瀬会長からは「遠方からありがとうございます。頂いた黒松は近く、植樹計画の中で植えさせて頂きます。支援金も頂き、感謝しております」とお礼の言葉があった。この後、昼食をとりながら双方のクラブの運営などについて話し合い、親睦を深めた。

乗用車から見た海岸では、沿線の黒松が津波の影響でかなり枯死しているのが確認出来た。改めて当時の恐ろしさが感じられ、寄贈した苗木が早く活着して大きく育ち、元の防風林のようになることを願った。

寄贈した苗木は3年前の3月、私が松ぼっくりから種子を取り出してまき、育成したもの。元々は植樹をし、地球温暖化防止に役立てようと生育させていたものだったが、震災の復興に使って頂こうと考え、寄贈することにした。

当クラブは東日本大震災の被災地へ数回にわたり支援金を贈っており、一日も早い復興を願っている。（PR情報会報編集委員長／斎藤敏夫）

335-A地区

兵庫県・尼崎レオクラブ

手書き看板で献血推進活動

尼崎レオクラブ（23人）は2012年の11月から、毎月第3土曜日に献血推進活動を行っている。3月16日にも今期5回目となる献血推進活動を行い、7人が参加した。この日は「けんけつちゃん」の着ぐるみも着用し、道行く人に献血を呼び掛けた。また、今までティッシュや風船を配っていたが、新しい試みとしてスーパーボールも配ることにした。着ぐるみの着用や風船、スーパーボール配りは子どもの興味を引き、その親御さんに献血を呼び掛けるため行っている。

また、今回は看板も作った。「けんけつちゃん」のイラストに「献血にご協力お願いしますっち！」と「けんけつちゃん口調」のメッセージを添えるなど親しみやすいものを作るよう心掛けた。この看板によって多くの人に、より直接的に私たちの訴えを伝えることが出来た。また、パソコンで作成した看板ではなく、手描きのものを使用したことにより、注目されやすく、心の込もった仕上がりになっていると、献血ルームの方にも褒めて頂いた。私たち自身にとっても、用意されたものを使うのではなく、自ら作成することで、より献血への意識が高まったと感じている。

第4回目の献血推進活動では、親御さんが献血をされている間、子どもを預かるキッズルームで折り紙を教える折り紙教室を実施し、好評だった。しかし、第5回では実施出来なかったため、今後はまた導入していきたいと考えている。このようにこれからも、私たちに出来る献血推進活動を積極的に行っていくつもりだ。（会長／堤希帆）

335-D地区

兵庫県・加古川東ライオンズクラブ

今期2回目 献血奉仕事業の実施

暖かな土曜日となった3月29日。加古川東ライオンズクラブ（吉島誠一郎会長／19人）の今期2回目の献血奉仕事業が、イオン加古川店で行われた。400ミリリットル献血のみの実施だった。

昨年11月に実施した際は、寒い時期にもかかわらず目標の2万ミリリットルをクリアした。少し暖かくなった今回は、前回以上の献血量を確保したいとの思いでメンバーは集合した。

準備を済ませたところ、早くも受付に人が並び始めたため、早々に例会を終え、受付を開始。また、献血啓発のティッシュ配りも始めた。朝はつぼみだった桜の花が、午後には開き始めるほどの陽気のせいか、消費税増税直前のセールのおかげか、いつもに比べ買い物客も多く、午前、午後とも献血協力者が途絶えることがなかった。おかげで、当初予定していた受付人数70人をクリア。献血者へのお礼に配っていたパンと玉子も買い足すほどだった。午後4時に受付を終了。最終的な受付人数は79人、採血者数61人。確保量は、2万4400ミリリットルとなった。

この事業を通して感じることは、若い人の献血が少ないこと。今回のように実施が400ミリリットル献血のみとなると、体重の条件があることも要因の一つと考えることも出来るだろう。しかし、少しでも献血に関心を持ち意識する若い人が増えれば、更に多くの方の命が助かると思う。献血奉仕事業の実施だけではなく、献血に協力する気持ちを広めることもライオンズクラブとしての大切な役目の一つと感じた1日だった。

（幹事／北野砂恵子）

334-D地区

富山ライオンズクラブ

合同事業から単独事業へ カンボジアにランドセル寄贈

富山ライオンズクラブ（松本臣市会長／75人）は、2006年度に334-D地区第1リジョン第1ゾーンの合同アクティビティでスタートしたカンボジアの子どもたちにランドセルを送る事業を続けている。現在は当クラブ単独で実施しており、8年間継続している。今年5月に集積検品後に輸送した1980個を含め、これまでにカンボジアに送ったランドセルは1万1千個を超えた。パートナークラブのプノンペン・オーパイコーン ライオンズクラブの協力で、プノンペン郊外の小学校やアンコールワット近くの小学校など10校以上に寄贈している。

初めは、富山市内にある60の小学校それぞれを訪問し、説明をし、集積していた。だが、現在は、小学校から問い合わせがくるほど認知され、地元メディアにも大きく取り上げられる事業になった。

この事業は、祖父母や親からプレゼントされ、大切に使ったランドセルを何かに役立てられないかと考えたことから始まった。小学校を卒業する子どもたちの思いと一緒に、学用品がほとんど支給されない国の子どもたちに届けている。

カンボジアでは小学生一人当たりの政府からの支援はわずか年1・5ドル。学校建設や学用品の支給など日本を始めとした他国からの支援が無ければ教育環境が整わない状況である。

今後もこの事業を継続し、物の支援だけではなく、日本の小学生とカンボジアの小学生との「心の交流」の一翼を担うことが出来れば、と考えている。

（カンボジアへランドセルを贈る委員会委員長　門前昌志）

「ゆるキャラ」に込めた地域活性化への願い

ゆるキャラ大集合

ご当地PRに活躍する「ゆるキャラ」。全国的なブームを巻き起こしたゆるキャラで地域活性化に貢献しようと、公募などで地元に新キャラクターを誕生させたライオンズクラブがある。

第5回目を迎えた今年の「ゆるキャラグランプリ」は、過去最高の1667件がエントリーして熱戦を繰り広げている。この号が発行される頃には既に投票が締め切られ、決選投票に向けてますますヒートアップしているはずだ。一時の熱狂的ブームは落ち着いた感があるが「ゆるキャラ」の人気は依然として高い。

この「ゆるキャラ」という名称は、漫画家のみうらじゅん氏が名付けたもので「ゆるゆるのキャラクター」の略だ。地域のイベントや特産品などのPRを目的に作られたマスコット・キャラクターを指す。着ぐるみになったマスコットのどこか間の抜けた感じが「ゆるい」と表現されて、2000年頃から雑誌やイベントで使われ始めた。

マスコット・キャラクターが盛んに着ぐるみ化されるようになったのは、80年代に全国各地で開かれた地方博覧会からだと言われる。マスコットそのものはそれ以前からあったが、それが等身大の着ぐるみになって動き出したのには、83年1月に開園した東京ディズニーランドの影響があったのかもしれない。何とかして地域の活性化を図ろうと模索する地方の自治体や団体によって、地元の名物をモチーフにしたキャラクターが生み出されていった。

そんな「ゆるキャラ」の人気に火を付けたのは、2007年に国宝・彦根城築城400年祭のイメージ・キャラクターとして登場した「ひこにゃん」だ。キャラクターの著作権使用料を無料にしたことで多種多様な関連グッズが生まれ、それがファンの心をくすぐって、人気は瞬く間に全国へと広がった。このロイヤルティー・フリーの手法は、後に続いた「くまもん」の爆発的ヒットの原動力ともなった。彦根城築城400年祭は「ひこにゃん」効果で当初目標の21万人を大きく上回る76万人余りの来場者を集めて成功。その後、グロテスクな風貌で物議をかもした「せんとくん」、2011年11月から2年間で1244億円（日本銀行熊本支店試算）の経済波及効果をもたらした前述の「くまもん」、ハイテンションな動きで子どもたちを虜にした「ふなっしー」と、次々に人気者が登場した。

「ゆるキャラ」で経済効果を上げられるのはごく一部だけとの指摘もあるが、郷土愛から生まれた「ゆるキャラ」の目的はそれだけではない。地域を広くPRするのはもちろん、そこに住む人たちが地元の魅力を再発見したり、「ゆるキャラ」を介して地域のつながりを強めるといった効果も期待出来る。

ライオンズクラブの中にも、地域を盛り上げようと新たな「ゆるキャラ」を誕生させたクラブがある。次ページからは、地域への愛と活性化の願いが込められた「ゆるキャラ」たちに登場してもらおう。

ただいま奉仕活動中！

大阪府・吹田東ライオンズクラブのゆるキャラ「サーブ君」

僕の名前はサーブ君。生まれたのは2年前の12月。その年の吹田東ライオンズクラブの会長さんが、「恵まれない子どもたちの施設におじさんばかりでゾロゾロ出向いても怪がられるだけだ」って、僕を作ろうと提案したんだ。それまでは寄付を渡して施設長さんとお話しするだけだったけど、僕が一緒に行くと子どもたちともっと触れ合えるようになって、達成感っていうのが湧いたんだって。

クラブには他にもいろんなアクティビティがあるけど、僕が大活躍するのが献血。前は1日70人ぐらいだったのが、僕の登場で目標だった100人超えを達成したんだ。みんなに喜んでもらえて、すごくうれしかった。街で献血の呼び掛けをしていると、僕の周りには子どもたちが集まってくる。その間に子どものお父さん、お母さんと気軽にお話し出来るから、ライオンズのことも説明して理解してもらえるんだって。

僕もクラブのみんなと同じ黄色いベストとライオンズのピン、それに帽子も作ってもらって、式典の時なんかはそれを着て出席するの。ちょっと緊張するんだけどね。一番うれしいのは、僕が来てからクラブの団結力が高まったって言われること。これからもみんなのためにがんばるね！

333-D地区

群馬県・高崎ライオンズクラブ

命の大切さを伝える絵本 購入の呼び掛け

東日本大震災から4年の月日が過ぎたが、その傷痕はあまりにも大きく、大勢の方がまだ苦しみの最中にいる。震災では多くの人が亡くなった。当時6歳だった佐藤愛梨ちゃんもその一人だ。愛梨ちゃんのお母さんは「絵本の中で生き続けさせてほしい」と絵本作家空羽（くう）ファティマさんに依頼をした。「命の大切さを伝える絵本」として作られたこの絵本の収益は、東日本大震災、津波での遺児を支援する団体に寄付することになっている。

ファティマさんは高崎ライオンズクラブ（関口啓一会長／195人）在籍メンバーの娘。そこでクラブでもこの絵本を通じてアクティビティが出来ないかという話になった。早速、例会にファティマさんをお招きし、この取り組みを追ったNHKのドキュメンタリー番組を視聴後、資金集めとその後の計画を話した。

クラブではこの絵本を幼稚園の教育現場に寄贈して、園児たちに人を思いやる心と命の尊さ、大切さを伝えてもらうことにした。また、それを通じて同世代のお子さんを持つ保護者の方々に絵本を購入して頂こうと考えた。

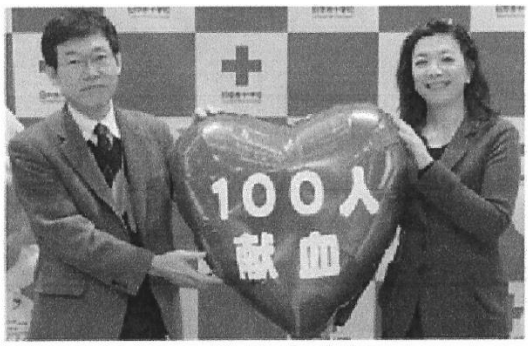
絵本は全国配送可能なアマゾン、群馬県内では紀伊国屋前橋店（ケヤキウォーク内）、ブックマンズ前橋、高崎店、宮城県内ではヤマト屋書店（5店舗全て）、金港堂石巻店で購入出来る。一冊でも多く購入して頂ければ被災地支援の寄付額も増える。全国の皆様のご協力もよろしくお願い致します。

（IT・PR・情報委員長／ジム・フレッチャー）

336-B地区

岡山ハーモニー ライオンズクラブ

もんげ～でーれー！ 献血WEEKで新記録達成



※「もんげ～」「でーれー」は岡山弁で「すごい」の意

岡山ハーモニーライオンズクラブ（25人）は、岡山西ライオンズクラブのスポンサーにより昨年10月28日に結成された女性会員だけのクラブである。2月16日から22日までの1週間を「もんげ～でーれー！献血WEEK」と題し、結成記念事業として、献血を呼び掛けた。これは献血者が少なくなる冬場の時期に、岡山県赤十字血液センターの協力で実施したもの。

初日朝早く開いたスターティングセレモニーには岡山県赤十字血液センターの池田所長にもご臨席頂き、瀧原秀美会長が「100人分の献血」を表すハート形の真っ赤な大型バルーンの目録を贈呈した。

これは当クラブ初めての奉仕事業であり、途中、会員の意欲が中折れしないか心配したが、瀧原会長の「100人分の愛をプレゼント」への強い思いが会員の気持ちを支え動かした。こうした会員の思いもあり、最終日には献血者数が100人を超え、最終的に111人という目標以上の実績を上げることが出来た。毎日血液センターの方に励まされたことや、広報委員長のつてでテレビや新聞、フェイスブックなど幅広い広報が出来たことも大きな要因となった。

献血者111人はライオンズ献血WEEKとしては当地区で新記録とのこと。新生クラブが会員の力を結集し最高記録を達成出来たことはすばらしい喜びであり、今後の活動の大きな励みになると思う。

岡山県赤十字血液センターを始め、地元マスコミの皆様に心から感謝申し上げます。

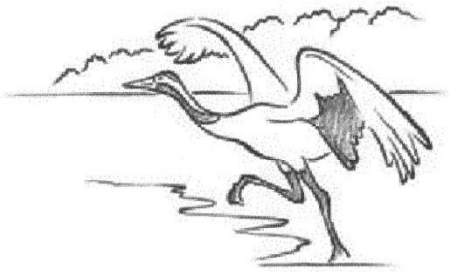
（社会福祉委員長／尾崎玲子）

我が献血人生

木本　正樹（福岡県・北九州シニア）

昭和39年に大阪市立大学に入学、同時にワンダーフォーゲル部に入部しました。そんな学生生活が始まった直後のこと、ある家族が献血のお願いをしている記事を新聞で読みました。

当時は売血による供血が多く、これらは「黄色い血」と言われ品質に問題がありました。大量の輸血を必要とする手術の場合、病院や主治医から必要な血液量を確保するよう要請され、出来なければ手術もすぐにはしてもらえぬ時代でした。



イラスト／小川和政

ワンダーフォーゲル部も社会貢献活動をやっていましたので、全面的に協力することになり、30人ほどが大阪日赤で献血しました。この昭和39年6月8日が、私の献血第1回になりました。

この年、アメリカのライシャワー駐日大使が、日本国内で暴漢に襲われ刺されるという事件が発生しました。国は全力を挙げて輸血用血液を確保したものの、残念ながら大使はその血液で肝炎を発症してしまいました。

当時、日本は世界一の血液輸入国で、早期に自給自足するよう世界から勧告されていました。大使は大変な親日家で、大騒ぎしないよう日米両国に表明されたそうです。場合によっては深刻な二国間問題になるところであったと聞いております。このことがあって、やっと当時の厚生省も重い腰を上げ、献血制度を法制化、売血を禁止して今日に至っています。

その後、昭和62年に部下を急性骨髄性白血病で失いました。入院期間中の面会は奥さんと私だけに限られていました。本当の病名はごく一部にしか知らせず、偽診断書を作成してもらって本人始め周囲には「再生不良性貧血」で押し通すという壮絶な1年間でした。

白血病の治療には供血が欠かせません。これが、私が定期的に献血をする動機付けになりました。

私はABO型、RH型以外にも赤血球や白血球など全ての型を日赤本社に登録しました。白血病や緊急時の輸血には可能な限り各型が一致するのが望ましく、そうした際の検査時間短縮のための登録です。適合者の手術時に献血したことも何度かありました。

献血370回を達成した平成6年。現役時代、私はずっと横浜に住んで東京に勤務しており、当時の長洲一二神奈川県知事から表彰を受けました。

4、5年前の福岡県のライオンズ並びに市区町村献血推進関係者合同研修会では、長崎の子どもの急性骨髄性白血病の闘病記録を視聴し、お母さんのナレーションに涙を禁じ得ませんでした。改めて献血の必要性を認識し、当クラブの卓話の時間にもメンバー全員にこれを視聴してもらいました。

平成22年の第44回福岡県献血運動推進大会には、日本赤十字社福岡県支部

獅子吼

献血ピンチに思い念ず

只井　保（大阪天神橋）

「献血ピンチ深刻に」

過日、新聞に大見出しでこう掲載されたのを見て、驚きと空しさを感じました。

30年前、私たち大阪天神橋ライオンズクラブは、大阪駅前第一ビルの献血ルーム周辺で献血奉仕活動を始めました。繰り返し献血なさる方を始め若い方々がとても多く、率先して協力を申し出てくださる人がたくさんいらして、一日中献血ルームがにぎわったことを記憶しております。

当時の日本経済は列島改造ブームで、高度経済成長期の真っただ中。あらゆる事業が右肩上がりの時代でした。あれから30年間の移り変わりの中で、経済、そして献血も大きく変化しました。「献血ピンチ」に歯止めを掛けるために、ぜひ企業、団体が協力されることを望みます。

さて、日本赤十字社の推計によりますと、２０１５年以降、手術や治療で必要な血液が不足する恐れがあるとのこと。血液の必要量がピークを迎える２０２７年には、献血者は最大85万人不足する見通しで、その後も不足数は拡大する見通しだそうです。

血液不足の要因の一つは、手術時に必要な輸血用血液製剤の８割以上を50歳以上が使っており、その年齢層が最多となる27年まで血液の需要が年々増加するからです。その後も高齢化が進み、需要の水準は高いままとなる模様です。

二つ目は、主に若年者の献血率の低さがあります。献血が可能となる16歳から19歳までの若者が献血をした割合は、00年度の10・2％から、11年度は5・9％にまで低下しました。その後も20代が7・4％、30代が6・9％と低迷しています。献血したことのない10～20代の若者を対象に国が行った調査によると、「献血が治療に役立っていることを半数以上が知らない」「針を刺すのが痛くて嫌」「何となく不安」などがその理由に挙がりました。

厚生労働省は平成２年度から、献血を理解するための高校生向けテキスト「けんけつ HOP STEP JUMP」を全国の高校に配布。平成17年度からは、これから献血出来る年齢になる中学生向けに献血全般の知識の普及を目的にポスターを配布するなどしています。国・地方公共団体及び日赤では、小・中学生の段階から献血に関する知識を得てもらおうと、普及・啓発を目的とした「キッズ献血（模擬体験を通して献血の様子や流れを理解してもらうもので、実際に針を刺すことはない）」を実施したり、さまざまな資料を配布したりしています。より多くの青少年に、献血の意義と向き合って学んでほしいものです。

私が考える重点的に促進すべき取り組みをここに列挙します。

1　献血の普及啓発促進
2　若年層対策の強化
3　安心安全で心の充足感が得られる環境づくり

現在、1年間に全国で５１６万人の方から血液を頂いております。

献血から生まれる愛の贈り物が、尊い命を救います。

ライオンズクラブ会員相互の理解・一体感がより深まり、献血活動が更なる発展隆盛の礎となることを願ってやみません。

（93年度会長／83年入会／85歳）

もう一度読みたい「あの記事」

●1975年5月号　獅子吼

「光あるうち」

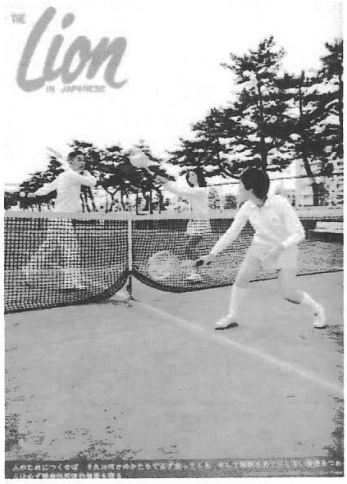
清水博（大阪府・島本ライオンズクラブ）

『ライオン誌』バックナンバーから、読者の皆さんにぜひもう一度読んで頂きたい記事をピックアップ。スペースの関係上、多少の編集を加えている場合があります。

ある日、見知らぬ婦人から一通のはがきが届いた。差出人の住所氏名に覚えもなければ、まして面識の記憶も更にない。

文面には達筆のサインペンで、こうしたためられている。

「（前文省略）わたくし、昨年暮れに手術をいたしましたおりには、あなたさまのかけがえのない血液をいただき、ほんとうにありがとうございました。おかげさまで昨年12月30日に無事退院いたしまして、その後元気に過ごさせていただいております。もっと早くお礼を申さねばなりませんのに……」



と、いたく恐縮の文意が続いている。

何某という女性に、血を捧げたなど全く覚えのない私は、家族の手前、すっかりうろたえてしまった。

翌日、早速差出人の電話を調べて、ご当人に直接問いかけてみたのである。

受話器に流れる女性のまろやかな声が、心なしか弾んでいて、繰り返し献血のお礼を述べられるのであった。

「……というわけで、心臓の手術を致しますのに、多量の輸血が必要だと言うので、結局血液銀行から14人血液を頂きました」

その時の献血カードのアドレスから、供血者一人ひとりに、くだんのお礼状を差し上げた、と言うのである。誠に律儀そのものの心根に、優しい佳人のほどが察せられた。

そういえば、いつだったか献血した記憶があるが、まさかあの時の200cc余りの私の血が、電話の声の主の体内を循環しており、手術の際に一つの命を救ったなど、どうして信じられよう。

「いつまでも、どうぞお元気で……」

と受話器を置いた後の心のたかぶりと、例のはがきを凝視する熱いまなざし。これこそ、求めずして報いられた喜びに、私は震えていたに違いない。

図らずも、こうした一通のはがきの訪れによって、ほのぼのとした春を迎えたのである。

3月15日、その日は私の50回目の誕生日にあたる。

今更心躍る感激も薄らいで、ただ無為に過ごした変哲もない齢の積み重ねに悔いを残すばかりである。

人生50年。昔風に申せば、私の花の生涯も閉幕に近く、終焉の時迫るの感があると言える。

幸いにして、日本人の平均寿命も大幅に伸びはしたし、私自身、すこぶる健康を保っているものの、生命あるうち、解脱を願う信心もないわけではない。ただ昨今とみに、私自身の生涯に何かメモリーを残しておきたいという念願と焦燥にかられて、家族の深い理解に支えられ、ようやくアイバンクに角膜提供の登録を済ませた。

光を奪われた人たちの社会復帰のための一助となって、私の命果てた後の、わずか2枚の角膜が、目の見えない人との愛の絆を保ち、なおも光を宿し続けるということは、何ともすばらしいことではないか。

トルストイの著作に『光あるうち光の中を歩め』というのがある。

やがては、光無き人の肉体の一部となるべき私のこの目に、今年の春の気配と装いが、何とも愛しく、さやかに映えることであろう。

CLUB REPORT

332-A地区

青森県・八戸ライオンズクラブ

10年間継続したアクティビティ パークゴルフ交流会実施

八戸ライオンズクラブ（田名部智之会長／72人）は9月12日、チャリティー・パークゴルフの交流会を実施した。この事業は継続10回目。会場は八戸市にある小久保パークゴルフ場だ。

当クラブがこの事業を始めることになった背景には、パークゴルフが青森、北海道で人気となっていたことがある。

当時、私がパークゴルフ協会八戸地区の会長を務めていたこともあり、イベントが実施しやすい環境にあったのも、この事業の推進を後押しした。

当日は秋の晴天に恵まれた。老若男女約90人の市民が参加し、パークゴルフに汗を流した。参加費の一部は、八戸地区少年警察ボランティア連絡会（長谷川厚会長）を通じて、「少年非行防止JUMPチーム」に寄贈している。

この少年非行防止JUMPチームはモラル低下を防ぐために、小学生、中学生、高校生が自らの学校の仲間や地域の方々を巻き込んで、非行防止の輪を広げていくことを目的に結成されたもの。県内555校、7500人を超える児童・生徒が参加しており、県内全ての中学校、高校に結成されている。小学校では2011年に始まったが、現在ほぼ全ての学校で結成されるようになった。JUMPチームのメンバーは県内各地区で薬物乱用防止キャンペーン運動や、万引き防止啓発活動などを実施している。

今年で10回目となったこの事業。JUMPチームなど多くの方々に喜ばれる事業となっている。

（地域奉仕委員長／柏木豊）

337-A地区

福岡県・伊都福岡ライオンズクラブ

最初は献血車1台から 献血者累計2万人突破の軌跡

9月10日、伊都福岡ライオンズクラブ（79人）は第37回献血活動を実施。献血・採血者累計2万人の大台を突破した。

当クラブは1997年3月に結成。メーン・アクティビティを献血事業とし、結成翌年、1台の献血車から活動を開始した。当初は会員の会社の駐車場で活動していたが、2001年から、学校法人川島学園・福岡舞鶴高等学校のグラウンドでの献血活動が始まった。03年からは福岡県下の献血車全7台を配車してもらい実施している。

前日の部活動、献血当日の授業等でのグラウンド使用を取りやめ、全面提供してくださっている福岡舞鶴高校のご協力なしには、この2万人という数字に到達出来なかったと思っている。また、テントの設営作業、献血終了後のグラウンド整備も同校の生徒が自主的に手伝ってくれている。こうしたご協力・ご指導に対し感謝の念が尽きない。

今回も140人の生徒の皆さんに献血して頂いた。若年層の献血不足が叫ばれる中、この事業を継続することで、生徒の皆さんの献血に対する認識が一層高まればと期待している。

参加者には、9月はところてん、2月は手作りぜんざいを配る。これらは当クラブ婦人部が前準備から協力してくれている。

10月13日には献血功労に対し日本赤十字社から感謝状を頂いた。また今年度は、当クラブから藤井勝彦ガバナー提言「情熱・絆・団結」を基に、今後とも学校当局・日赤・会員三者の更なる相互理解を含め3万人突破を目指していく。（会長／大舘照光）

獅子吼

多くの団体からの支援で、現在の場所に新築・移転して、その年10月12日から子どもたちが自由に走り回れる幼稚園が再建された。

私がみどり幼稚園を訪問したのは、開園から約4カ月後の3月5日である。思うように復興が進まぬ旧市街地を見つつ、迷いながらも、新しい幼稚園にたどり着くことが出来た。

佐々木園長は、見るからに温厚で優しい園長先生という印象である。限られた時間の中、子どもたちの元気な声を効果音に、園長先生からお話を伺うことが出来た。園長が最後におっしゃった「子どもの数イコール町の将来」という言葉が印象に残っている。世は少子化云々と騒ぐが、被災地にあっては転出という深刻な問題もあることを思い知らされた。

この子どもたちが地元に留まり、この街の復興の一端を担い、そしてこの街の歴史を見届けてほしいと強く願う。

（12年入会／14年度地区『ライオンいわて』編集委員／56歳）

血の尊さ・そして今献血

岡本　崇（和歌山県・御坊）

もう40年前のことになる。幸せに美しくとの願いを込めて「幸美」と名付けた三女を、掛けた願いとは裏腹に、小児がんで亡くした。この子は「Rh マイナス」という特殊な血液型だったので、見ず知らずの方から新鮮血の輸血を頂いた。輸血の量は1回200ミリリットル。わずかカップ1杯量の血を頂いただけで、あの子の青白く透き通った頬と唇にポーッと紅が差してきた。ぐったりとしていた子がムクムクと起き上がって、「お母ちゃん！　お腹が空いた、何か食べたい」と言い出したのだった。「血液とは栄養素を運んで体内を流れている単なる赤い液体ではない。血の中には頂いた人の真心がこもっている」と血の尊さに感動した。

娘亡き後、私は献血に努め150本に達した。それら献血に関係して気付いたのが「若者の献血がいかにも少ない」ということだった。これは全国的な傾向で、10～20歳代の献血者数が減少を続けているという事実も知らされた。若い人の献血が少ないということは、献血人口の底辺が小さいということで、今後、年々提供者が高齢化してゆけば、絶対量が減少していくことを意味する。近い将来、血液が不足するという事態に陥ることが心配だった。献血人口の底辺を形成する10代の中心は大方が高校生で、高校生献血に積極的に取り組むべきという思いが私の胸に湧いてきた。

私が40年前に経験したような、患者の関係者が新鮮血を求めて走り回ることは、現代の我が国ではもう無い。でもそれは、いつでもそれに対応出来るだけの血液が、日本のどこかの血液センターに確保されているからだということを忘れてはならない。縁あって高校生や大学生などに「血の尊さ」を話すようになったのは、このような経験があったからに他ならない。

爾来、献血とは、採血をするという単なる「行為」ではない。血液に込められた「人の真心」を人に伝える、言い換えれば「人から人への命のリレー」という大きな「社会的使命」を持っているという持論を、世の人々、特に現代の若者たちに語り続けてきた。残念なことだが、その私も今や老齢のこと

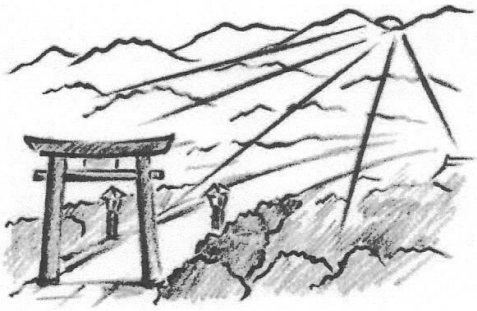
もあり体調を損ね、講演活動をお断りすることを余儀なくされている。

講演した高校や大学からは感想文が送られてくる。それらの書き出しはまるで申し合わせたように「献血は痛い、怖い、だからしない。これからもするつもりはない」とか、「献血バスに何度か行き合わせたが、私一人くらいしなくても関係ないだろうと顔を背けて通り過ごしました」などである。いわゆる献血に対する恐怖心と無関心というやつだ。これは高校生も大学生も全く同じことで、年齢によって考えが進歩している訳ではない。ところが「痛い怖い」と書いた生徒たちが皆といって良い程「岡本さんの話を聞いて血の尊さ、献血の大切なことが分かりました。僕の血が、私の血液が、誰かを救うことになるのなら、そんなことは言ってはいられない。今度は必ず献血をします」と、心境の変化を書いてくれていた。「早速献血ルームへ行ってきました」というものもあった。

紆余曲折はあったが、やっと「学校に献血バスが来る」ということになった日。献血バスに乗り込む大抵の生徒は、初体験の緊張で顔がこわばっている。看護婦さんから「針を射します。少し痛いですよ、ごめんなさいね」と優しい声を掛けられ、こわごわ差し出した腕からほとばしり出る真っ赤な自分の血液を見た時、生徒の心の中では驚きと感動のドラマが展開されたことであろう。採血が終わってきっちりと止血帯が巻かれ、「400ミリリットル頂きました。ありがとうございました」の声を背に献血バスから降りてきた時、乗る時とは大違い、自信満々、とっても良い顔をしているのだ。「案外簡単やった」と笑う言葉の裏に「俺（私）って良いことが出来るんだ」という思いが自然と現れるのだろう。この「良いことが出来る、人のために何かが出来る」という、献血を体験したことから生まれた他人への思いやりが、多くの若者の心に定着して行動を起こしたら、その時こそ我が国の未来は明るいと言えるのではないだろうか。

今、献血事業の前途は決して明るいとは言えない。このままでは献血人口は減少する危機をはらんでいる。解決策は若者の献血を推進すること以外にはないと思う。出来るだけ早く高校生献血に取り組むことである。そしてこれを実行出来るのは、ライオンズクラブの他にないと私は信じる。

（78年入会／09年度地区献血委員長／82歳）



盲導犬はどんな仕事をするのか

下郡　良一（大分県・玖珠）

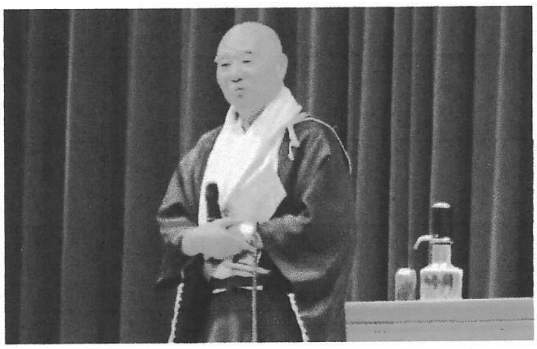
私は今期、玖珠（くす）ライオンズクラブの第2副会長及び福祉委員長を拝命しました。そして小野哲郎社会福祉委員長と山越由紀枝同副委員長の提案により、大分盲導犬協会の支援に取り組むことになったのです。そこで私は改めて盲導犬について勉強を始めたのですが、『〈刑務所〉で盲導犬を育てる』（大塚敦子著）という本を読み、大変学ぶことが多かったので、私が特に重要だと感じた点を抜粋してご紹介したいと思います。この本は、受刑者が更生プログラムの一つとして盲導犬の子犬を育てる過程を追ったルポルタージュです。

CLUB REPORT

335-C地区

奈良県・大和高田ライオンズクラブ

若人よ、心を磨け！ 薬師寺管主、熱く語る



大和高田ライオンズクラブ（辻本純久会長／48人）は、2015年11月4日、青少年育成委員会の事業として、大和高田市立高田商業高等学校に薬師寺管主である山田法胤（ほういん）師を招いた。山田法胤師の講話のテーマは「戦後70年これからの生き方」。

師は生徒、職員を前に「さまざまな認識を身に付けることが人生の宝となる」と語った。これは、多様な価値観、認識を知ることで、さまざまな心の物差しで物事を見ることが出来るということ。そのためには心を磨き、多くの認識を受け入れる努力をする必要がある。また、働くことには自己以外の人々の幸せにつながる意義があるとのお釈迦様の教えを、ご自身の生い立ちを交えながら分かりやすく話して頂いた。なおかつ、将来の日本を良い方向へ変える志を持った若者になってほしいという、本クラブ会員の願いも合わせて伝えて頂いた。90分の熱弁を聞いた生徒からは「これから社会に出る私たちにとって、とても貴重な経験でした」「今後多くの人と出会う中、辛くても我慢をして、どんな人にも喜びを与えられる人間になりたいです」「認識をたくさん蓄え、物差しを多く持つ人間になりたいと思いました」「同じ行動や言葉でもとらえ方で大きく変わるということに気付かせて頂き、人間としても大きくなれたと思います」と感想が寄せられた。

本クラブは結成以来、主として青少年育成事業を中心に展開してきた。これからも未来を担う青少年の育成に努力を重ねていきたいと考えている。（青少年育成委員長／森川英司）

332-C地区

宮城県・女川ライオンズクラブ

おながわ秋刀魚収穫祭で 献血活動の実施

2015年9月20日、女川町で行われたおながわ秋刀魚収穫祭2015の会場で女川ライオンズクラブ（12人）は献血活動を実施した。この収穫祭は女川魚市場敷地内で18年前から行われている大規模イベントだ。町の中心部は震災で壊滅的な被害を受けた。しかし、この収穫祭はまだ被害の爪痕が残る11年秋に再開された。その年から、町内の女川町民第二多目的運動場で開催されていたが、昨年は復興工事が進む町内で、そして今年はついに、再建された魚市場で開催されることになった。来場者数も徐々に回復してきている。

この収穫祭での献血活動では、女川魚市場受入協同組合様の協力で、献血者に秋刀魚1箱10尾入りをプレゼントしており、震災前は500人以上の献血希望者がいた。この数は、宮城県内はおろか、全国でも1地点での1日の献血者数で日本一ではないかと赤十字の方が話していた。

献血活動は一昨年から再開。一昨年は約180人、昨年は約250人、今年は約350人の献血希望者があり、徐々に増加している。当日は献血車3台、眼科ビジョンバン1台を導入。石川達雄地区ガバナー、佐々木喜蔵ゾーン・チェアパーソン、石巻日和ライオンズクラブの松田弘美会長が活動を盛り上げてくれた。来年は更に献血希望者の増加が見込まれることから、献血車の台数も増やす予定である。

献血は健康な人なら誰でも出来る社会貢献活動だ。皆様もぜひ来年のおながわ秋刀魚収穫祭に参加して頂き、献血にご協力頂ければ幸いである。

（会長／加藤忠雄）

獅子吼

ラブは運営もスムーズで活気がある。一方、リーダーの牽引力が十分でないクラブは活力が無く、解散に至ってしまう最悪のケースも見てきた。そういった意味で、私が所属するライオンズ情報・指導力育成・接待委員会は、非常に重要な委員会だと言える。

ここで、ライオンズクラブの役職について今までの経験から感じたことを述べてみたい。

1985・86年度、ライオン倉成一八がクラブ会長だった時、次期ゾーン・チェアパーソンに決まっていたライオン横山幸信からクラブ幹事だった私に、ゾーン幹事をやってほしいと打診があった。自分はまだライオン歴も浅く若輩ゆえ会長に相談したところ、

「依頼者は相手を見込んでのことだから、よほどの理由がない限り受けなさい」

とおっしゃった。

そして翌年度、私はゾーン幹事の役を受けた。横山ゾーン・チェアパーソンは、

「会員は決して安くない会費を払っているのだから、例会出席と奉仕活動のみではもったいない。入会した以上、何の役でも良いから受けて勉強することに意義があり、楽しさも分かる」

と教えられた。とはいえ自分は元来マイペースな人間。役職などは苦手な性格である。それでも倉成会長の言葉を胸に、これまでゾーン・チェアパーソン、地区委員長、リジョン・チェアパーソン等の役職を受けてきた。ライオンズの役を受けるのは、正直なところ最初は誰でも「嫌だなあ。出来ればやりたくないなあ」と思うかもしれない。それでも「YES」と返事をしたらやるしかない。そして年度が終わる頃になって、ようやく要領が分かってくる。その間に支えてくれた仲間の意外な才能、人柄に感激し、喜びが湧く。また、多くの友というかけがえのない財産を得ることが出来るのだ。

今、私は、人生の糧となったこれらの経験を得られたことに感謝している。まさに「顧みて燃えにし頃は輝けり」の心境である。メンバーの皆さん、積極的にライオンズの役を受け、燃えてください！

（81年入会／ライオンズ情報・指導力育成・接待委員長／71歳）

プロジェクトL　町民1%献血への道

大谷　健治（北海道・由仁）

ライオンズクラブは、起死回生の勝負に出ようとしていた。以下は、献血奉仕に邁進したライオンたちの苦闘の記録である。

◆決断の時

当クラブでは年に3回の献血を実施している。次回は4カ月（女性が400ミリリットル全血献血をした場合に必要な最低間隔）を挟み、4月30日。月末ということからも、集客上良い日ではない。前日にはクラブの柱事業の桜植樹祭もある。しかし、ここは献血奉

◆敗北から

献血ひまわり号が来町した2014年12月25日。クリスマス当日であるこの日は案の定、人出はまばらで献血者は35人に留まった。敗北である。このままでは日赤から、

「ひまわり号派遣では40～50人献血が目安です。由仁町さん、最近厳しいですよね」

と、引導を渡されかねない。

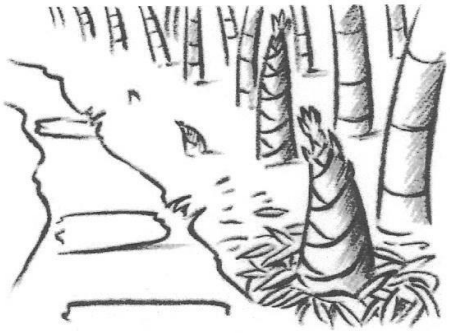
しかし敗北を教訓に、由仁ライオン

仕活動存続へ決断の時だ。
「会長、ご決断を！」
三役会に悲鳴が上がる。
「よし、分かった。『ねばーるくん』（会員が勤める納豆メーカーから献血の景品として提供される納豆をクラブ内でこう呼んでいた）に出動要請だ！」
「チラシに町内放送だ！」
決断は下された。三役会会場「鳥セイ」の外には漆黒の帳が降りていた。

◆THE　DAY

その日、第1会場の町役場ロビーは人であふれていた。町職員、各団体関係者や町議まで。これは大変、「ねばーるくん」が足りない。町長が眼前を通り過ぎる。拍手が湧き、花束が渡される。2期8年を全うしたT町長退庁セレモニーであった。セレモニー終了と同時に人混みが霧散していく。
「イカーン！　乙作戦発動！　丙作戦準備！」
庁舎内に、近隣事業所に、動員指令を持って「密使」が走る。……しばしの静寂の後、続々と人が集まり始めた。初めての方も多い。協力者に配布される「ねばーるくん」を追加発注。各位置へメンバー配備、計画実行！
16時、作戦終了。受付来場七十余人、受付通過66人、採血者55人。総採血量2万2千ミリリットル。ひっきりなしに来客を受け付けた日赤職員、ひたすら採血に努めた看護師から拍手が湧く。
「由仁町人口は5581人です。0・985%の献血率です」
「四捨五入だ！」
会長最後の指示が飛ぶ。……かくして、町民1%献血は達成された。
ひまわり号の皆様に、何よりも献血に来てくださった皆様に感謝。

（08年入会／クラブ幹事／59歳）



ライフワークとしての山づくり

室野　和行（北海道・苫小牧ハスカップ）

カラマツ林の伐採跡地であった古里の山（8ヘクタール）で、1994年から植林を始めました。職業が測量業、土地家屋調査士業であるため、よく山林に出掛けます。もとより山が好きで木に興味がありました。
山の専門家である友人に相談しますと、森林組合に入った方が良いとのアドバイスを受け、早速、組合員になりました。
最初に、3年で植林を完了するという計画を立てました。地ごしらえは自分で行いました。5月の連休は、古里の親の家に泊めてもらい、プロパンボンベを背負い山焼きをしました。植林は森林組合にやってもらい、1万8千本ほど植え付けました。木はトドマツ、カラマツ、ミズナラ、ヤチダモ等。しかし山づくりは植えたら終わりではなく、そこからが始まりです。まず5年ほどは下草刈りをしなければなりません。枯れる木、鹿に食べられる木、鹿

3分間
ライオンズ
アクティビティ編

保健
献血①

愛の献血が日本ライオンズの血肉となった

今や日本ライオンズでは最も多くのクラブが実施しているアクティビティの一つとなった献血事業。ここに至るまでには先人たちの熱意と努力がありました。

血液が生命を維持するために重要な役割を果たすことは古代から認識されていましたが、人から人への輸血が行われたのは19世紀に入ってからのことでした。そして1900年にオーストラリアの医師・ラントシュタイナーがABOの血液型を、更に14年に血液の抗凝固剤を発見したことにより、血液を採取して保存し、輸血に使うことが出来るようになりました。37年にはアメリカに世界初の血液銀行が設立。第2次世界大戦では輸血により多くの負傷兵の命が救われたそうです。

日本では52年に日本赤十字社血液銀行東京事業所が開設されます。が、民間による商業血液銀行も作られたため、日赤への献血はごくわずかで、お金を稼ぐために血を売る人がほとんど。しかも健康を害するほど売血を繰り返した人の血液は赤血球が少なく黄色い血漿が目立つことから「黄色い血液」と呼ばれ、輸血の効果が少ないばかりか肝炎などの副作用を招きがちでした。

1967年5月、東京秋葉原ライオンズクラブは東京都台東区の小学校を会場に献血を実施。500人もの市民の協力を得た

60年代に入ってもほぼ100%が売血だった献血事業は64年、大きな転機を迎えます。当時のライシャワー駐日アメリカ大使が暴漢に刺され、輸血が元で血清肝炎を発症したのです。政府は、輸血用血液は献血により確保するという決議を採択。献血に対する啓発と、事業体制の整備を進めていきます。

そこでライオンズが活躍を見せます。65年、302W・4地区（現在の336・C、D地区／広島、山口、島根各県）は年次大会で、「献血運動・花いっぱい運動」をアクティビティ・スローガンに採択しました。

66年に結成された東京秋葉原ライオンズクラブは結成記念アクティビティとして献血を取り上げて以来、人を見れば「血をくれ、血をくれ」と頼み込み、「吸血クラブ」と冷やかされるほどに傾注していきます。75年にはラジオ、テレビで献血を訴えるCMを放映、献血受付数4万4900本と日赤創立以来の採血量新記録（当時）も樹立しました。

80年代に入ると、全血輸血に加え成分輸血が導入され、献血は日本中のクラブに広まっていきました。一方、薬害エイズ問題を機に、世界の血漿の3分の1を消費し、しかも95%を輸入に頼る日本の血液事業のゆがみが浮き彫りになります。厚生省は血漿の国内自給を提唱し、成分献血推進がその骨子となりました。そうした中、京都平安ライオンズクラブの尽力で初の大型採漿ルームが京都市に開設。各クラブでも成分献血へと活動の幅を広げていきます。

そして90年、時代によって変化する献血のニーズに迅速かつ強力に対応してきた日本ライオンズは、昭和天皇のご遺金を元に日本赤十字社が創設した献血推進賞・第1回受賞の栄に輝いたのでした。

3分間
ライオンズ
アクティビティ編

保健
献血②

工夫を凝らして血液を確保

オンライン報告システム・サバンナで報告されたアクティビティを集計したところ、日本ライオンズが2014・15年度の1年間に行った献血アクティビティは約1万3500件、約70万人から2億8千ミリリットルを採血（200ミリリットル、400ミリリットル、成分献血合計）し、1億9千万円を拠出。約8割のクラブが、年度内に何らかの献血関連事業を実施していました。献血はまさに外部組織（日本赤十字社）とパートナーシップを組み全国規模での継続事業を成功させた模範例であり、日本ライオンズを代表する奉仕活動の一つと言えるでしょう。

献血アクティビティの中でも、街頭や公共施設で、またはクラブが主催する別の事業や、地域の祭りなどのイベント会場の一角で、日赤から献血バスを出張してもらって行うものが最も一般的です。ライオンズは近年、個人情報保護の観点から受付業務には関われなくなりましたが、それでも事業全体の計画や日赤との連絡、事前PR、当日の献血の呼び掛け、協力者への謝礼等々、大きな役割を担っています。

苅田工業校高校で献血を実施する苅田ライオンズクラブ

日赤によると、日本の少子高齢化が進む中で、いかに血液を確保するかが大きな課題となっています。輸血用血液製剤や血漿分画製剤の大半は高齢者の医療に使われ、その対象者は今後も増加することが予測されますが、その一方、健康な血液を供給してくれる若い世代の人口が減っていくわけです。こうした中で、多数のライオンズクラブが実施している、地元の高校や大学での献血アクティビティは大変意義のあるものだと言えるでしょう。最初は献血を怖がっていた生徒でも、趣旨を理解し経験してみると「人の役に立ててうれしい」と誇りに思ってくれるそうです。

更に、まだ献血が出来る年齢には達していない小学生、中学生のうちからその重要性を学ぶことで、16歳になったら自然に協力してくれるようになることが期待されます。皆さんのクラブでも子どもを対象とした献血に関する啓発活動を企画されてはいかがでしょうか。

その他、ライオンズ・メンバーの会社や地元企業に協力を求め、社員の集団献血を行うことも出来ます。この場合、あらかじめ採取出来る血液型や採血量の予測が立てられることも利点の一つです。一例として、『ライオン誌』2013年9月号には地元企業及び高校、大学で献血を実施している福岡県・苅田ライオンズクラブの活動を紹介していますので、参考になさってください。ライオン誌ウェブマガジンのバックナンバーでもご覧頂けます。

読者から―4月号

■継続支援を考え中

「特集：子どもの貧困」を読み、ライオン紀里谷和明の記事に感動しました。それと共に、自分たちも何か行動を起こさなければと考え、具体的な行動計画を作り始めました。

特に「安い」ということが貧困を生んでいるとの言葉に多くを考えさせられました。一時的な支援ではなく継続的に続く支援を考えていきます。

北海道・白滝ライオンズクラブ●奥山壽雄

■子どもの貧困という現実

「子は国の宝であるか」については、立場や見方の違いによって大きく意見が分かれています。そして、子どもの貧困についても、往々にして自己責任や親の責任として論じられることがあります。

しかし、満足な食事も取れず、また教育の機会も得られない事態が生じている現実が目の前にあります。それが自己責任であるか否か、また行政が対応すべきであるか否か、はたまた貧困率が何%であるかなどに一切関係なく活動をしているNPOがあるということに感動しました。同時に、ライオンズクラブが、子どもの貧困対策という一つの目的のためだけに存在するのではなく、同一地域に多数のクラブがあり、それぞれが、その地域で必要とされる社会奉仕を対象に活動するという、単なるNPOではない、ライオンズクラブの存在意義も再認識出来る記事でした。

神奈川県・小田原日梅ライオンズクラブ●大南修平

■「献血への道」で思うこと

獅子吼に掲載されていた「プロジェクトL　町民1%献血への道」を拝読しました。

献血は誰でも健康な人であれば行えます。献血には協力したい……しかし、60歳を超えての献血には「サアー、やるぞ！」の決意が要ります。その決意をして、受付をしても関門が待っています。

第1関門は該当項目チェック……ドキドキします。

第2関門は比重のチェック、医師の問診……ハラハラした気持ち。そして献血……血管がなかなか見つからない。ようやく無事400ミリリットルの全血献血を終了し、ホッと一安心。

私の献血はこんな感じです。年齢は61歳になりました。献血が出来る年齢は16歳～69歳までですが、65歳以上の献血は60歳から64歳までに献血経験がある人に限られます。さて、後何回出来ることやら……。

健康と奉仕、どちらも続けていきたいものです。

新潟県・分水ライオンズクラブ●渡辺將氏

読者プレゼント

■熊本の特産品をセットで読者10人に

4月14日以降、熊本、大分両県で千回を超える有感地震が発生。しかも震度7や震度6強、6弱など激しい揺れがたて続けに起こり、大きな被害をもたらした。その熊本地震被災地の特産品をセットにして、10人の読者にプレゼントします。内容については、プレゼント発送時期に合わせ、編集部で選ばせて頂きます。

プレゼントをご希望の方は、はがきに「熊本応援」と明記し、氏名、クラブ名、住所、電話番号をご記入の上、ライオン誌プレゼント係までご応募ください。本誌へのご意見、ご感想もお書き添えください。締切は6月末日。応募多数の場合は抽選となります。

【宛先】〒104-0028 東京都中央区八重洲2-6-15 JOTOビル9階 日本ライオンズ事務所・ライオン誌
＊オンライン応募はライオン誌ウェブマガジン(www.thelion-mag.jp)の「ライオン誌日本語版」→「プレゼント応募」から。

〈56ページクイズの解答〉第1問=b.／第2問=c.／第3問=c.／第4問=c.／第5問=b.